

異世界から来たソル ジャー R—18版

ライダーGX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは本編で書かれなかった物語を書かれるお話です。

18未満は絶対お断りですよ！

目次

牛飼娘との初夜	♥	1
三人娘の初体験	その1	13
三人娘の初体験	その2	21
三人娘の初体験	その3	31
もう一度牛飼娘と		38
上森人との一夜		47
可愛い子達への快樂	その1	58
可愛い子達への快樂	その2	68
神官と上森人のご奉仕		78
幼馴染のお乳体験		89
神官へのお礼		98
受付嬢の初めて		106

新たな場所での…	その1	116
新たな場所での…	その2	127
素直な武闘家		137

牛飼娘との初夜



伯父さんがいない間に楽しい夜を過ごす事にしたソルジャーと牛飼娘、二人はベッドに座り込み、ソルジャーは牛飼娘の身体を一度見る。

牛飼娘の恵まれて発達した身体、大きな胸、細い体、大きなお尻、どれも美味しそうな身体であった。

ソルジャーが見ている様子に気付いた牛飼娘が少々恥ずかしがる。

「いやん、そんなにジロジロ見ないで」

「ははは、ごめん。でもすごい体だ。…もつと見せてくれ」

「……うん」

そう言うのと牛飼娘は顔を赤くし、恥ずかしながらも立ち上がって身体に巻いているシートを取る。

すると隠れていた牛飼娘の裸があらわになる。

大きな胸の中心にピンク色の乳首、細いウエスト、そしてマ〇コの薄い毛がありながらも綺麗に整えられていた。

そんな牛飼娘の身体にソルジャーは思わず唾を飲む。

「お、大きい！ こ、こいつのおっぱい…なんてデカいんだ！普通じゃ有り得ないサイズだ！100cm以上はあるぞ!?」

じいじいじいじいと見つめているソルジャーの様子に牛飼娘は真っ赤になりながら両手で大事な所を隠す。

「も、もう…！見過ぎだよ…！ ねえ…君も脱いで」

「お、おう、そうだな」

その事にソルジャーも自分の着ている服を脱ぎ始める。

そして下着だけとなったソルジャーの身体を牛飼娘は思わず目が釘付けとなる。

分厚い胸板、割れた腹筋、丸い肩と太い上に血管が浮き出ている上腕筋、分厚い背中に太い太ももの足。

ソルジャーの発達した筋肉に牛飼娘はそれに惚れ惚れしてしまふ。

「す、すごいね…君の体、服の上からだとは分からねなかったけど。下はそんな感じなんだ…」

「そ、そうか…よかった。日々鍛えていた甲斐があつたな、ははは…」

ソルジャーは褒められた事に嬉しがり、そしてもう我慢出来なくなつて、牛飼娘を思わず抱きしめる。

「きゃん」

突然抱きしめられた牛飼娘は戸惑いながらも、彼と同じように腕を回して抱きしめる。

そしてお互いの顔を見つめ合い、そしてキスをする。

チュ、チュウ、チュ：チュチュ！チュパ！チュパ！チュパチュパ！

最初は軽いキスだったが、徐々に深く、熱いキスへと変わり、二人は少し休憩するためキスをやめる。

口から唾液の糸を伸ばして、少し息を切らせながら見つめる。

「ハア…ハア…ハア…ハア…き、キスって…すいね？」

「ああ、…確かに…こんな感じは初めてだ」

つと言いつつもソルジャーは牛飼娘の胸を見続けた、それに気付いた牛飼娘が問う。

「ねえ…おっぱい、触りたい？」

「え？い、良いのか？」

「うん、いいよ…いっぱい…触って」

その言葉に甘えて、ソルジャーは牛飼娘の胸を触る。

ムニユン♥

「んっ…」

思わず身体が驚く牛飼娘にソルジャーは戸惑う。

「あーすまん！痛かったか？」

「うーううん……！ 違うの……ちよつと感じただけ。…いいよ」

「あ、ああ…分かった」

それにうなづくソルジャーは再び牛飼娘の胸を揉み続ける。

ムニユンムニユンムニユンムニユン ♥

牛飼娘の途轍もない胸の柔らかさにソルジャーは驚きを隠せない。

「（や！柔らかすぎる……！まるでマシユマロみたいだ！よーし！）」

「んう……んっう……♥」

感じているのか、揉み続ける牛飼娘の巨乳をソルジャーは更に揉み続ける。

すると感じすぎているのか、乳首がピンピンに勃起しているのに気付く。

「あ、乳首が勃ってる」

「い、言わないで♥ ……吸ってもいいよ♥」

その言葉にソルジャーは牛飼娘の乳首を吸う、最初は勢いよくじやなく、ゆつくりと乳首を吸い、そしてまた吸い始める。

そしてソルジャーは牛飼娘の胸を吸うのやめて、彼女にベッドに座らせるよう指示する。

するとソルジャーはまだ脱いでいない下着に手をかけて、脱ぐ。

牛飼娘は彼のペニスを見てまたしても驚く。

彼のペニスの長さが15cmくらいあり、更に太く血管も浮き出ている。

「す、凄い…大きい」

「ああ、なあ…しゃぶってくれ」

「えっ?でも…どうやって?」

「口にくわえて、上下に動かす様にしてみてもいいから」

「う、うん…」

少し戸惑いながら牛飼娘は口を大きく開けて、彼のペニスをくわえてしゃぶり始める。

ジュパ♥ジュパ♥ジュパ♥ジュパ♥ジュパ♥ジュパ♥

最初は上手くないと思っただけだが、牛飼娘はまるで経験あるかの様にフェラを上手く動かし、それにはソルジャーは戸惑いを隠せない。

「う。上手いな…どこで覚えたんだ?」

「ぷあつ…、え、えつと…：実はお父さんとお母さんがこういうのを見たことあって、それです…」

「(な！なんて子なんだくく!! て言うか親父さん！お袋さん！娘に見られてるぞ!!)」

心の中でそう叫びながら天国に居る牛飼娘の両親に言うソルジャー。

その間に牛飼娘は徐々に大きくなる彼のペニス徐徐に大きくなっていくのを感じて、一回くわえるのをやめる。

「れろっ…んっ…ぷはあ。す、凄い…どんどん大きくなっていく」

「ああ、…良いか？」

「…うん」

ソルジャーの言っている言葉を理解したのか、牛飼娘はベッドに仰向けとなり、そして足を開いてM字開脚をする。

すでに牛飼娘のオマンコはかなり濡れていて、準備万端の状態である。

それに誘われるかのようにソルジャーは入っていき、彼のペニスと彼女のオマンコが当たる。

その様子にソルジャーは牛飼娘の顔を見て言う。

「…挿れるよ」

「…うん。来て…」

その言葉と同時にソルジャーはペニスを牛飼娘のオマンコに挿入する、彼女のキツイ膣内と彼の大きなペニスの二人は思わず感じる。

「くっ！」

「うっ…！」

そしてゆっくりと挿入っていき、そして途中で何やら壁みたいなものに当たる。

ペニスが彼女の処女膜に到達して、それにソルジャーは一度彼女の顔を見る、牛飼娘はそれにゆっくりと頷き、彼女の腰を掴んで一気に突っ込んでいく。

ズポツ！！

「っ！くっ！うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！！！！！！」

処女膜消失の痛みに耐えながらも牛飼娘はシ！！ツを掴んで握り締め、彼女の膣からうっすらと血が出て来る。

ソルジャーはすぐに動かず、牛飼娘の身体を気遣いながら呼吸を整える。

「ハア…ハア…ハア…、挿入った…大丈夫か？」

「ハア…ハア…ハア…ハア…。う、うん…大丈夫。一瞬だけ…痛かったのは」

「そうか…それじゃあ」

「うん…動いていいよ♥」

彼のペニスが彼女の子宮口にあたり、それに更なる気持ちよさが二人を襲い、そしてソルジャーの動きが更に早くなる。

パンパンパンパンパンパンパン

パンパンパンパンパンパンパン

パン

「くっ…!! やーやばい…!! イキそうだ!」

「あっ♥あっ♥あっ♥き♥来て♥中に♥中に出して〜♥♥♥」

「くっ!!イク!!!」

パン!!!

っつと腰を一回大きく叩きつけた後に、ソルジャーの大量の精液が勢いで出て牛飼娘の子宮に入っていく。

ドピュー!ドピュー!ドピュー!ドピュー!ドピュー…!!ドピュー…!!

「あ♥ああああああああ♥♥」

牛飼娘は入ってくる精液に絶頂し、身体を震えながら彼の精液をしつかりと受け止めていた。

ソルジャーの精液の勢いが収まり、一度ペニスをオマンコから引き抜く。

するとオマンコから精液が出てきて、牛飼娘は少し身体を起こして、自分のオマンコに触れて、手についた精液を見るのだった。

そしてソルジャーと牛飼娘は疲れたのか、互いにベッドの横になって。牛飼娘はソルジャーに寄り添う様に抱きついて言う。

「凄かった…、これがエッチ…なんだね」

「ああ…、俺も…気持ち良かったよ」

「うん、私も気持ちよかった♥」

嬉しそうにソルジャーに抱きつく牛飼娘、すると牛飼娘がこんな言葉を言い出す。

「ねえ…、もし君のパーティーの女の子達とエッチしたらどうなるんだろうね？」

「なっ！おま！　なんて事を言い出すんだ?!」

牛飼娘の大胆発言に驚くソルジャー、牛飼娘はクスクスと笑いながら謝る。

「ふふふ、ごめん。でもあの子達結構可愛いでしょう？　もしそうなたらどうする？」

「そ、それは…」

その事に言葉が出ないソルジャー、しかし牛飼娘は…。

「私は別にいいよ。あの子達とシても」

「えっ?」

「だって、君…優しいし、強い上に気遣い上手だもん。絶対あの子達は惚れてるよ、きつと…。だからその責任、しっかりと果たしてね？　それなら私は別に構わないよ。

それならもしスるなら、私も混ぜて？」

　　つとその言葉を聞いて少し考え込むソルジャー、もしその事が可能なら願ったり叶ったりだが…。

「わ、分かった。考えておくよ…」

「うん ♥ 絶対だよ ♥」

「(す、凄い言葉を言ってくる子だ。俺…マジでしっかりしなきゃな)」

　　そう心の中でそう思うソルジャー、でもその日の夜は忘れられない思い出になった事は間違いではなかった。

三人娘の初体験 その1

ゴブリンの襲撃を撃退し、来たる脅威を退治したソルジャーはその翌日、その間に牧場の空いた穴を埋める作業をしていた。

他の冒険者たちがかなりの大仕事をした為の当然の結果ではあるが、作業が一人でやっているのも意外と大変である。

皆にも手伝ってもらいたかったのだが、また頼むのも大変なので、今回は一人でやっている。

そんな中でも伯父は牧場の修復の為の木材を買いに行くついでに、二、三日は家を開けている。

その間にソルジャーはと言うと…。

「ねえ、そろそろだよな？」

牛飼娘はある事を言い出し、それにソルジャーは振り向く。

「ああ、そうだな。そろそろアイツ等が来る頃だ」

つとそう言っていると、道沿いから女神官達がやって来て、ソルジャー達は女神官達が来たのを感じて振り向く。

「おう、来たか」

「はい、あ、あの…」

「その話の中に入ってからにしよう、ほら、入って」

「はい、失礼します」

そう言つて女神官達は家へと入っていき、ソルジャーの後を追いかける。

ソルジャーは自室に書いて、部屋に入ると女神官達はソルジャーの部屋を見渡す。

するとソルジャーはケミストビルダーツールタブレットを使って、隠し部屋の扉を開かせて、階段を降りていく。

それには女神官達は勿論の事、牛飼娘もそれには驚いていた。

「どうしたんだ？ こっちに来いよ」

ソルジャーの誘いに女神官達は戸惑いながらも、隠し部屋の階段を降りて行き、牛飼娘もそれに続いて降りていく。

そして階段を降り終えて、少し進むと扉があり、その中に入って特別部屋に着く。

特別部屋を見た牛飼娘と神官達は部屋にある色々な機材を見て問いかける。

「ね、ねえ。これって…」

「ああ、俺の特別部屋、俺は何時もここで剣と銃、そして身体を鍛え上げている。勿論、鎧の加工もここで行っている」

つとソルジャーは向こうの方に指をさすと、そこには鎧と剣が置かれてあつて、それに女神官達は気づく。

「そして本日のメインはここじゃなく、こつちだ」

ソルジャーは奥にもう一つの扉がある方に向かい、牛飼娘も女神官達もその後を追いかけていく。

もう一つの部屋に到着すると、そこには縦6 m、横4 mの大きなベッドがあり、その奥にはガラスで覆われたシャワーとバスタブが置かれてあつた。

それを見た女神官達と牛飼娘は思わず頬を赤くして、ソルジャーの方を見る。

「そ、ソルジャーさん：：／／」

「もう：：君つてエッチだね。なーんて、分かつてたけど♪」

「ははは：：、それじゃあ、皆。良いか？」

その言葉に牛飼娘は勿論のこと、女神官達もそれに頬を赤くしたままうなづくのだった。

ベッドルームでソルジャーはすぐに服を脱いでいる所、女神官達は自分達の衣服を恥ずかしそうになりながら脱いでいた。

勿論牛飼娘も同じように服を脱いで、裸になってソルジャーの元に行く。

「ねえ、彼女たち見て」

「ん？」

パンツだけになったソルジャーは女神官達の方を振り向くと、そこには全裸となり、両手で胸とマンコを隠している女神官達が立っていた。

「は、恥ずかしいです：／／／」

「ソルジャーさんに見られてる：／／／」

「あ、あんまりジロジロ見ないで：／／／」

そう言いつつもソルジャーは女神官達の身体を見る。

女神官は胸はそんなに大きくないものの、ウエストやヒップはかなり美しく、更に白い肌により魅力を感じさせている。

女武闘家の方は胸は中ぐらい大きく、バランスの良い体つきをしていて、お尻もかなり美しい感じをしていた。

女魔術師の方は、三人の中で胸は大きく、お尻も少し大きい為、かなりの豊満な感じに見えた、そしてメガネも外していてかなり美しく見えた。

「あれ？メガネ外しても大丈夫なのか？」

「ええ、そんなに目が見えない訳じゃないから、そ、それよりも…ソルジャーさん。どう？ 私達の身体…変？」

つとその事を言い出してきた事にソルジャーはすぐに頭を横に振る。

「い、いや。そんなことないぞ。そ…その、隠している所、見せてもらえるか？」

その事に女神官達は身体が反応し、恥ずかしながらも隠している手をゆつくりと下ろすのであった。

すると彼女達の素肌が現わとなる、三人娘達の乳首は牛飼娘と同様にピンク色の乳首をしていて、かなり綺麗なものであった。

そして股の毛は、女神官達の髪と同じ色をしていて、形も綺麗に整えられていた。

その様子を牛飼娘も見ていた。

「うわあ、皆綺麗な身体してるね？」

「そ、それは貴女もですよ…／＼／＼」

「そうですよ、私達よりもおっぱい大きいし、それにお腹もそんなに出てない…」

その事を言われると、牛飼娘は頬を赤くしながら照れてしまう。

ソルジャーはそろそろ我慢出来なくなっていて、股のペニス完全に勃起状態になっていた。

「なあ、そろそろいいか？」

「っ!? は、はい…いいですよ」

「でもソルジャーさん、私達三人だと疲れませんか？」

「それは大丈夫だ、一人づつやればいいさ。それにいざって時に『秘密道具』を使うさ」
つとそう言つてソルジャーは棚にある白いカプセルの薬が入った箱を取り出して、皆に見せる。

それに女神官達は見る。

「なんですかそれは？」

「これは『分身の薬』と言つてな、ある魔術師が実験の為に持っていた薬を一つ貰つただ。それを俺が調べてみると、こいつには身体を分身にさせる他、意識も分けることも出来るらしい。」

これは凄いと思つてこつちで分析して、複製に成功したんだ。効果は2時間程度だ。今回はこれは使用しないでやろつか」

「嘘、そんなのがあつたなんて…」

女魔術師がその薬を見て信じられない表情をしていて、ソルジャーは女神官達の方を向く。

「…じゃあ、そろそろ良いか？」

つとその事を聞くと、女神官達は真っ赤な顔をでうなづくのだった。最初にソルジャーは三人娘達の胸を揉み始める。

まず女神官で、次に女武闘家、最後に女魔術師の順で優しく揉みほぐす。

3人共個性豊かでなかなかの感度があつて、胸が小さい女神官でもなかなか柔らかくて気持ち良い感度だった、女武闘家は良い揉みほぐしで、時に乳首をいじって感じさせている。女魔術師は大きい分かなりよく、手が沈んでしまうほどであった。

「んっ、ああ…ああ♡」

「っああ♡ か、感じる…♡」

「す、凄い…♡」

そしてソルジャーは三人の乳首をなめて、コロコロと舐め回して、口の中に加える吸う。

一人一人と順番に吸って、母乳を飲むかのように優しく吸う。

「ジュル、ジュルジュルジュルジュルルルルル」

「んっ♡ああっ♡♡」

「ああっ、ああっああ…♡」

「はああ…ああ…ああああ♡」

その様子を牛飼娘はたまらなそうに見て、自分の胸とマンコを触っていた。

「(凄い…私とした時にはあんな感じだったのかな? でも今の感じだと彼。彼女達の母乳を飲んでる感じに見えるなく…)」

そう思いながらも、ソルジャーは一度三人から離れて、自分の下着に手をかけて下ろす。

彼のペニスが現わになったのを見て、女神官達は驚いた表情をする。

「お、大きい…」

「すごい…」

「それ…、本当に私達の中に入るの?」

「ああ、そうだ。…最初は誰からやる?」

その事を言われて、三人は顔を見合うと、まず最初に女神官が手をあげる。

「わ…私からやります」

「分かった、それじゃあベッドでやろうか」

その事に女神官はうなづいて、ベッドに向かい、ソルジャーもその後を追うのであった。

三人娘の初体験 その2

女神官をベッドに寝かせるソルジャー、女神官は心臓をはち切れそうなくらい高鳴り、彼女のその様子を察したソルジャーは女神官の頬に手を触れる。

「大丈夫だ、俺に任せてくれ」

そう落ち着かせながら、ソルジャーは彼女の股に手を伸ばし、女神官のマンコに触れる。

触れた瞬間、女神官は身体をピクリと感じさせ、彼女のマンコを触れ続ける。

「うっ……うっ……!!」

薄々感じている女神官にソルジャーはマンコのクリトリスに触れると、女神官は思わず身体を反り返る。

「あぁっ……!!」

「感じるのか？」

「は、はい……！ 凄……電気のような感じがして……」

「そうか、ならこれは」

そう言うソルジャーは彼女のマンコに顔を近づけ、舌でマンコを舐める。

「んああ…!!」

それには女神官はまたしても感じて身体を反り返り、ソルジャーは彼女のマンコを舐め続ける。

その様子を牛飼娘や女武闘家と女魔術師は頬を赤くしながら自分の胸を揉み続ける。ソルジャーは女神官のマンコを舐めた後に、自分のペニスを彼女にマンコに触れる。

「いいか?」

「はい…、どうぞ。私の処女…差し上げます」

女神官の覚悟の言葉にソルジャーはうなづいて、彼女の腰を掴んで、ゆっくりと挿入していく。

ソルジャーの大きいペニスに女神官は苦しそうな表情をしながら耐えて、そして処女膜にたどり着くと同時に、一気に突っ込んで子宮口までたどり着く。

「ぬあああああああ!!」

それには女神官はたまらず声を上げる。

マンコから血を少し流し、女神官は呼吸を乱れながらも、声を上げながらもなんとか耐えて、ソルジャーはその様子を見て問う。

「大丈夫か?」

「は、はい…大丈夫です。ど、どうぞ…ソルジャーさん、動いても…良いですよ」

その言葉にソルジャーはうなづいて、ゆっくりと腰を動かす、前後に動く感触に女神官は最初は苦しい表情をしていたが、徐々に柔らかくなつてきて、気持ちよさしうな表情をする。

「んっ…、うっ…、あっ…♡ んあっ…♡」

「どうだ？気持ちいいか？」

「はい♡ 気持ちいいです…♡」

女神官は快樂の気持ち良さに頷き、ソルジャーは一度止めて、片足を上げて体位を変えて、後ろに少し回って、背面測位にして後ろから突く。

感じかが変わった事に女神官はより感じて気持ちよくなり、ソルジャーは彼女の胸を揉みながら突き続ける。

パン♡パン♡パン♡パン♡

ソルジャーの腰と女神官のお尻がぶつかって、気持ちいい音が鳴り響き、そして女神官が限界を感じてくる。

「そ♡ソルジャーさん♡ わ、私…もう♡」

「俺もだ、そろそろ行くぞ！」

ソルジャーは背面測位から正常位に戻して、女神官と対面しながら腰を突き続け、そして。

「だ、出すぞー！」

「は♡はい♡ ソルジャーさん♡ 中に♡中に♡下さい♡」

その言葉に甘えてソルジャーは女神官の中に射精し、それに女神官は感じながら返り返ってイってしまふ。

「あ♡ぬああああああ♡♡」

ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！……ドクン！

大量の精液が女神官の子宮に入って、そして射精が止まって、一度抜いて精液がマンコの入口から出る。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

女神官は呼吸を乱れながらも少しの間気を失い、その様子にソルジャーはシーツを被せる。

その様子を見た牛飼娘達はソルジャーに寄る。

「凄かったね？ こっちが興奮するよ」

「そうか？ それじゃあ次は君だな」

つとソルジャーは女武闘家の手を握って、それに女武闘家は顔を赤くしながらうなづく。

「チュツ…チュツ…チュツ…♡」

ソルジャーと女武闘家はキスをしながら互いの胸とペニスを触っていた。

二人は一旦キスをやめて、女武闘家はソルジャーのペニスを見る。

「ソルジャーさん、少し精液が付いてますよ。綺麗にしてあげますね?」

女武闘家はその場でしゃがんで、フェラチオをして、ソルジャーのペニスを綺麗にしていた。

「ジユプ…ジユパ、レロ…ジュルルル」

「おお…、いいぞ、うまいぞ。上手じゃないか?」

「ホント、あんた。どこで覚えたのよ」

女魔術師が妙に上手い女武闘家のフェラチオに少しからかい、それにフェラチオをやるめて手コキしながら言う。

「べ、別に好きでを覚えた訳じゃ…、ただソルジャーさんに気持ちよく出来る方法を探したらこれを…」

「なるほどな、それじゃあ俺もお返しとして…」

つとソルジャーは女武闘家を一度持ち上げて、姫様抱っこにし、ベッドに下ろして仰向けにさせて、女神官と同じようにマンコを舐める。

それには女武闘家は感じる。

「んぬああああ♡」

「レロレロ…：ジュルルル」

マンコを舐めては吸い、彼女たちのおっぱいと同じように扱い彼女を愛する。

ソルジャーの優しい気遣いに女武闘家はますます感じていく。

「ああ…♡ そ、ソルジャーさん…：私…：そろそろ欲しいです」

「ああ、そうだな」

そう言ってソルジャーは再び挿入するべく、女武闘家のマンコにペニスを当てる、そして入口に当ててゆっくりと入れていき、それに女武闘家は耐えながら言う。

「そ、ソルジャーさん♡ 一気に来てください。お願いします♡」

「そうか。分かっ…：た！」

つと腰を掴んで一気に突き刺し、処女膜と同時に女武闘家は歯を噛み締めながら耐える。

「ぬんんんんんん!!」

うつすらとマンコから血を流す女武闘家、それにはソルジャーと牛飼娘達もたまらず

心配する。

「だ、大丈夫か？ 無理してないか？」

「そ、そうよ、無理して強がらなくても」

「だ、大丈夫ですよ。それに私…本来ソルジャーさんが助けに来てくれなかったら、私はゴブリンに…」

目元に涙を溜まらせながらソルジャーの手を握る女武闘家、確かにあのままだったらゴブリンに酷い目に合わされていたに違いない、それを思うとソルジャーに処女を上げるのは容易いことだった。

「だから…ソルジャーさん、思いつきり愛してください。そして…もしも出来れば…赤ちゃん。欲しいです」

つとその言葉にソルジャーは目を少しばかり開かせて、口元をにやけながら言う。

「分かった、ただそれは君だけじゃなく。彼女達も同じようにするけど、いいか？」

「はい、皆もいれば怖くないです」

「ふふふ、そうね。私も君の赤ちゃん。欲しいし」

牛飼娘は寄り添いながらソルジャーの頬にキスをして、耳元で言う。

「だから…皆、いっぱい愛してあげて」

「よし、分かった」

そうやって腰を動かすソルジャー、それに感じる女武闘家は胸を揺らせながら手の上に置く。

「あん♡あん♡あん♡あん♡あん♡ き♡気持ちいい…♡」

「ほら、こつちにおいで」

ソルジャーは彼女を起こして、対面座位で女武闘家を愛し合う。

腰を上突き上げて、彼女の膣にペニスをよくこすり、子宮によく当たって、女武闘家は感じる。

「ああん♡す、凄い♡ 感じる♡」

「ああ、俺もイキそうだ」

そうやってソルジャーは女武闘家を抱きしめ、それに女武闘家も腕を回す。

そしてソルジャーのペニスが限界に達する。

「グッ…イク!!!」

ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！

ソルジャーの精液が女武闘家の子宮に流れ込んでいき、そして勢いが止まって、ゆっくりと抜く。

女武闘家のマンコから精液がゆっくりと出てきて、幸せそうな表情をして女武闘家はそのまま目をつぶるのだった。

優しく眠る女武闘家の様子にソルジャーは彼女を抱えて女神官の隣に寝かせ、同じようにシーツをシーツを被せる。

牛飼娘と女魔術師はその様子を見て問う。

「どうだった？ 彼女は」

「どうだったって…俺も結構頑張ったから」

「そうじゃないよ。『出来たかな』って事」

牛飼娘の言っている意味にソルジャーは理解して、それには申し訳なさそうな表情をする。

「それはまだわからない。いきなり出きた…なんていくわけじゃないから」

「そうね、それじゃあ…次は私」

チュ…

つと女魔術師がキスをしてきて、そしてソルジャーを押し倒し、その上に乗る。

「おっと…」

「貴方に主導権を握られると、二人の様になっちゃいそうだから。だから…」

そう言つて女魔術師はソルジャーの手を握り、そして頬を赤くしながら言う。

「私がたっぷりと愛してあげる。その後に主導権、渡すわ」

三人娘の初体験 その3

女神官、女武闘家の次に女魔術師とシしようとした時に、女魔術師が主導権を握って、今度は自分からソルジャーを愛そうと考えた。

女魔術師はまずキスから始め、ソルジャーとキスしながら互いの舌を絡ませ合う。

「チュ…チュパ、チュル…チュ」

「ちゅ…ちゅう、ちゅばちゅば…」

二人はディープキスをしながら手を握っていた、その時に女魔術師が右手を離して、ソルジャーのペニスを掴む。

それにはソルジャーは思わず感じる。

「おお…」

「あら、感じてるの？敏感ね…、でも凄いわね…二人に出したばかりだって言うのにもうこんなに固くしてる」

女魔術師は勃起しているソルジャーのペニスを手コキしながらいい、それにソルジャーは苦笑いする。

「まあな、でも意外だな…君がこんなに積極的とは…」

「べー別に貴方のためについて訳じゃないから…！ ただ…気持ちよくさせたいって思いはあるわ」

そう言つて女魔術師はソルジャーの乳首をなめる、舐めてる間にソルジャーのペニスをシコる。

彼女のやり方にはソルジャーは感じていく。

「お、おお…」

「どお？ 私のテク…なかなかでしょう？ でもやりまくつてるなんてなんか無いんだからね？」

「分かつてるよ。でもこうして主導権を取られると逆に興奮するな…」

「そうね…、私も凄く興奮してる…」

そう言つて女魔術師は舌を乳首から離れて、胸をペニスの元まで運び、それを両胸で挟み込む。

彼女はソルジャーに『パイズリ』をして上げており、女魔術師は胸を動かしてソルジャーのペニスをシコシコさせる。

女魔術師の胸が大きいからこそ出来る事、当然女武闘家も出来るが、残念ながら胸の小さい女神官では出来ない、つがまだ彼女等は15歳、これから身体が成長する時期、期待はないことはない。

そんな中で女魔術師は胸を動かしてペニスを気持ちよくさせていた。シコシコシコシコつと胸を上下に動かして、ペニスをより感じさせていく。柔らかい胸の弾力と厚みに徐々にペニスは大きくなっていく。

「う、うおおおお…や、やばい」

「い、イキそう？ 出してえ…濃い精液…いっぱい出して」

その言葉にうなづく様にソルジャーはペニスから精液を吐き出すかの様に射精する。ペニスから大量の精液が噴水の様に飛び出て、女魔術師の顔と体にかかる。

その様子に女魔術師は体と顔に付いた精液を見て、ひと舐めして微笑む。

「うふふ…、沢山出たわね。でも貴方…あんだけ出したのにまだ元気」

ペニスがまだまだへばってない様子に女魔術師は微笑みながら言う。

「まだまだいけるわね。それじゃあ…」

そう言つて女魔術師はペニスの方に跨り、ペニスを掴んで膣の入り口にピタリと付ける。
る。

「最後の方は主導権を返すわ。好きなだけ動いて…」

「ああ、そうさせてもらうよ」

ソルジャーはそう言つて頷き、女魔術師はペニスを掴んだままゆっくりと下げ、自分の膣内に挿入していく。

パン♡パン♡パン♡
パン♡パン♡パン♡

ソルジャーの腰使いに女魔術師はより感じていて、それにはソルジャーも感じていた。

そしてペニスが徐々にふくらんでいき、ソルジャーは限界を感じる。

「い、行くぞー！」

「ええー！来てー！私の子宮に全部出してー！」

その言葉と同時にソルジャーは一気に腰を突き上げて、彼女の子宮に自分の精液を流し込む。

ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！

女魔術師の子宮に大量の精液が入っていき、勢いが収まってソルジャーはペニスを抜く。

彼女の膣穴から精液が出てきて、垂れ流しながらシートの上に溢れる。

女魔術師は呼吸を乱れながらソルジャーの上にもたれ掛かれ、そしてソルジャーの顔を見てキスをし、最後に女神官達の寝転がる。

その様子をソルジャーは女神官達を見ていると、牛飼娘が腕にしがみついてくる。

「ねえ、見てたらこっちもしたくなっちゃった…。ねえ…エッチしよう?」

その言葉にソルジャーは微笑みながら牛飼娘の方を向いて、顔をこっちを向かせて互いにキスをするのだった。

「…ん、うん…」

そしていつの間にか寝ていたソルジャーは体を起こすと隣には牛飼娘や女神官達がぐっすりと眠っていた。

ソルジャーは牛飼娘とエッチして、中出しを3回していた。

その時に女神官達も目を覚まし、また彼女たちもまだまだやり足りない感じだった

為、ソルジャーとエツチした。

当然彼女達にも中出しして、満足感を与えた。

そして時間を確認する為、マルチツールタブレットの時間を見る。

時間はエツチしてからまだ2時間ちよいだった、その時間にソルジャーは頭をかき、ベッドから降りて、壁を開けて中にある飲料水を取って飲む。

水を少しのみ、ソルジャーは彼女達を見つめながら思うのだ。

「…必ず彼女達を守り、幸せにしてみせる。必ず…」

その思いが彼の心をより強くしていくのであった。

もう一度牛飼娘と

水の街での依頼を終え、辺境の街に戻ってきたソルジャー達、そして報告をギルドに終えた後、女神官達にある事を言う。

「え？お休み…ですか？」

「はあ!?なんでよ！ あんた冒険に付き合うつて言つたじゃない！」

「いや〜そうなんだけど、やっぱり一度無理をしたからあいつの所に戻つて安心させないといけないから、あいつこの事にはとても敏感だから」

「そんなに？」

女魔術師は牛飼娘の感の鋭さを思わず思い浮かばせ、ソルジャーは妖精弓手の方を向き手を合わせる。

「すまない、休みと言つても2日だけだから、そんな時に冒険だ！」

ソルジャーはそう言つてすぐに牧場へと戻つていく。

妖精弓手は不機嫌そうな感じになり、女神官がそれを抑えるのだった。

そしてソルジャーが牧場へと戻り、家に入ると叔父さんがいた。

「ん？おお君か」

「ただ今戻りました、えつと…彼女は？」

「今は牛たちの世話をしているよ、…早く顔を見せてあげなさい」

「はい」

そう言われ、ソルジャーは牛たちの所に行く。

牛たちの所に来たソルジャーが牛飼娘を探していると、牛飼娘が子牛と一緒に歩いている姿を見つける。

そして牛飼娘がソルジャーの存在に気付き、ソルジャーが牛飼娘の元に近寄り、彼女は微笑みながら言う。

「お帰り…」

「ああ、ただいま」

そして夜、夕食を食べた後、ソルジャーが特別部屋でトレーニングをしていると、牛飼娘がやって来て、ソルジャーの背後に抱きつく。

「ねえ、無茶したでしょう…」

「…すまない、予想外の相手と出くわしちゃって」

「え？君がそんな事を言うなんて…」

「意外だろうか？ だから二日間はお休みだ、その間この牧場の手伝いでもするよ」

つとその事を言うソルジャーに牛飼娘は彼の頭を掴み、こちらに振り向かせた後キスをする。

「んっ…ちゅっ…ちゅ」

そして一度キスをやめ、二人は見つめ合う。

「お前…」

「ねえ…しよう」

「いいのか？ 今日叔父さんがいるぞ？」

「叔父さんはもう休むって言って部屋に戻ったよ。だから…ね？」

つとその事を言われると、絶対に止まらないソルジャー。

トレーニングをやめて、すぐに牛飼娘に抱きついて、彼女もソルジャーに抱きつく。

別部屋のベッドルームでソルジャーと牛飼娘は互いに全裸になり、ソルジャーと牛飼娘はキスをしながら抱きつき、互いのペニスと胸を触りながら続けた。

「チュチュ、ちゅう…ちゅう♡」

「(おおこの感触！ やっぱりこいつの胸はデカイ！)」

二人は一度キスをやめて、ソルジャーは牛飼娘の胸を吸う。

彼女の胸囲は何cmは分からないが、少なくとも100cm近くはある。

そんな彼女の胸をソルジャーは美味しそうに吸う。

「ジュール、ジュールジュールジュール〜」

「んっ〜あっ♡ い、いいよ…♡ 私のおっぱい美味しい？」

彼の頭を優しく撫でる牛飼娘はソルジャーに自分の胸の事を問い、一旦吸うのをやめるソルジャーは彼女の方を見ていう。

「うん、凄く美味しいよ、お前の胸。そうだ、今度母乳が出る薬を作ろうか？」

「え？そんな事ができるの？」

「ああ、俺に任せろって、その時はもっとうっ」

「もう♪ ねえ、もつと吸っていいよ…♡」

それにおまんじて、ソルジャーは牛飼娘の胸を吸う、また彼を優しく撫でる彼女はもう片方の胸を揉みながらソルジャーを見つめる。

そして十分に満足したソルジャーは彼女の胸から離れ、そしてペニスを牛飼娘の顔に近づける。

「しゃぶってくれるか？」

「うん…♡」

そう言つて牛飼娘はソルジャーのペニスをしゃぶる。

「ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ」

「おお…いいぞ、大分上手くなったな？」

「ジュパ…、えへへ…何度もヤつてると自然と上手くなるよ」

牛飼娘は再びソルジャーのペニスをしゃぶる。

「んっ…ジュパチュパ…」

「っ…おお…、いい…凄いで」

フェラチオが上手くなった牛飼娘の口に満足するソルジャー、当然牛飼娘もソルジャーが気持ちよくなっているのを見て満足していた。

一旦フェラチオをやめる牛飼娘。

「よかった。君が気持ちよくなってくれて」

「それじゃあ、お礼としてそろそろいいか？」

先程より大きくなったペニスを見ながら言い、それに牛飼娘は頬を赤くしながら言

う。

「うん…」

すると彼女は壁に向かって進み、壁に手をつけてお尻を出す。

「今日は後ろからやってみたいな。ちよつぱり興奮するかもこれ…」

「分かった」

そう言つてソルジャーは彼女の腰を掴み、ペニスを掴んで牛飼娘のマンコに割れ目に合わせ、穴を見つけてゆつくりと入れる。

「ふーふははあああああああ……！ は、入った……！」

「やっぱりお前の中は熱い、そして気持ちくらい良い……！」

ジユポ♡ジユポ♡ジユポ♡ジユポ♡ジユポ♡

後ろから腰を動かすソルジャー、その動きに牛飼娘も思わず身体が動く、そして連動するかの様に彼女の胸が大きく揺れる。

「あつ♡あつ♡あつ♡きき♡ 気持ちいい……♡」

「お、俺もいい……これは……かなり締まる！」

立ちバックする二人は更に興奮する為、ソルジャーは牛飼娘の片足を持ち上げ、犬の

おしっこする体制にする。

「いやん♡これ恥ずかしい…♡」

「でも興奮するだろう？」

「うん♡興奮する♡」

そう言つて腰を動かし続けるソルジャー、片足を上げた事により更に感度が増す牛飼娘。

「あん♡あん♡あん♡あん♡あん♡あん♡」

「くっ！い！イキそうだ！」

「出して♡中に…いっばい♡」

「ならこのまま子づくりしちゃうか♪」

「もう♡」

ちよつとの悪ふざけもわかる牛飼娘、ソルジャーはそのまま一気に腰を突き上げ、牛飼娘の子宮に精子を注ぎ込む。

ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！

「うううあああああああ…♡」

熱い精液が彼女の子宮にたんまりと満たし、ゆっくりと抜いて白い糸を垂らして、そこから精液が溢れ出てくる。

セックスを終えた二人は隣にあるシャワールームに入り、抱き合いながらシャワーを浴びていた。

「ふふふ♡気持ちよかった♡」

「本当だったらもうちよつとやりたかったんだがな」

「これ以上やると叔父さんが心配で見に来るからね。そこは我慢かな？」

「でもこれでまた俺は頑張れそうだ」

その言葉を聞いて牛飼娘は微笑み、より強く抱きしめる。

「私は信じてるから、君が無事に帰ってきてくれる事…」

「ありがとう。必ず無事に帰ってくるよ」

「うん、その時は君の赤ちゃん…産んであげる」

「えっ！ほ！本当か!？」

「ふふふ…嘘♪」

つとはぐらかす牛飼娘に思わずガックシくるソルジャー。

「そ、そんな…」

「でも、結婚したら何人でもいいよ？ この前言ったあの子もそうだし」

「っ！そうだ…そうだな」

そう言いながら二人は微笑み、そして再びキスをするのであった。

上森人との一夜

この間、妖精弓手との冒険の約束を出来なかつた為、そのお詫びに妖精弓手と二人で共に冒険する事になっているソルジャー。

妖精弓手は嬉しき満載で古い遺跡の調査をし、ソルジャーは壁に描かれている絵の文字を調べていた。

「ねえオルクボルグく、そつちはどう？」

「おう、気になる文字が多数あるが、どれも大したもんじやないだろう」

「あまい！オルクボルグ、貴方はこれほどの貴重な物を大したもんと言うもんじやないわよ！」

「お、おいおい……」

冒険になると人が変わってしまう妖精弓手、それにはソルジャーは呆れてしまう。

「第一もつと冒険を楽しまないと！ でなきや冒険者の名が泣くわよ？」

「あのな……、冒険も危険が付き物って何時何処の場所でも言うだろう。楽しい冒険はそうでもないぞ」

「ちよつと！聞き捨てならないわね！私は！——」

つと妖精弓手がソルジャーに近づこうとした時、彼女の足元に穴が空いて、それに思わず足を踏み外してしまい、落ちそうになる。

「て！うわ！うわわあ!!!」

「っ！危ない!!」

ソルジャーが思わず走り出し、妖精弓手が真下にある岩にぶつかりそうになった所を、ソルジャーが助ける。

つが落下の際にソルジャーの左足が岩にぶつかり、その痛みがソルジャーに伝わる。

地面に落ちる際にソルジャーが受身を取り、そのお陰で妖精弓手が無事だったが、ソルジャーは思わず左足を抑える。

「ぐう……!」

「オルクボルグ!!」

そして夜、近くの岩の洞穴で焚き火を付けながら妖精弓手はソルジャーの手当てをし

ていた。

包帯を巻き終わると、ソルジャーは妖精弓手に礼を言う。

「すまない、ありがとう」

「全く…あんたも本当に無茶するんだから、でも……」

すると妖精弓手は顔を赤くしながらソルジャーの方を見て、言葉を詰まらせながら言う。

「その……ありがとう。さっきは助けてくれて」

「いいさ、ハイエルフで可愛い子を助けるのは紳士として当然」

「っ!!か！可愛いって!!? あたしはこう見えて2000歳よ！どこが可愛い子ってみえ

r—」

「そこだよ。2000歳でも心は俺とそう変わらない程だ、そこが可愛い所なんだ」

ソルジャーの言葉に妖精弓手は真っ赤な顔をしながら視線をそらし、ソルジャーはそれに微笑みながら妖精弓手の顔を触れて、こっちを向かせる。

妖精弓手は目をうつとりさせながらソルジャーを見つめ、ソルジャーと妖精弓手はそつと顔を近づけて、キスをする。

「んっ…ちゅ♡ ちゅ…ちゅ…ちゅ♡」

妖精弓手の唇はとても柔らかく、そして暖かい、それに舌も唇と同様に柔らかかった。

ソルジャーと妖精弓手は一度キスをやめて問う。

「どうだ…？ 気分は？」

「つく…なんか…変な気分になってきた」

「良いんだよ、変な気分になっても」

それに妖精弓手は微笑みながら見て、再びソルジャーとキスをし、彼の股間を触る。

「あら、あんたの…もうおつきくなってる」

「ああ…お前の可愛い様子を見てこうなった…」

「も…もう…、バカ…」

顔を赤くしながらも、妖精弓手は微笑みながらソルジャーを見て、ソルジャーも微笑みながら妖精弓手を見ながら、彼女の服に手をつけるのであった。

そして互いに全裸になり、妖精弓手のとてもスレンダーな身体を見る。

無駄のない身体で、贅肉が全くない所が凄かった、そして彼女は自分の胸を腕で隠していた。

「いやん……あまり胸見ないで。本当に小さいんだから……あのドワーフに馬鹿にされるほどだから」

「大丈夫だ。俺はお前の胸を馬鹿にはしない、絶対にだ」

「本当？」

その言葉にソルジャーは頷き、妖精弓手は胸を隠している腕を退かす。

すると彼女のスレンダーな胸が露になる、小さいが形は整えられていて、ピンク色の乳首が綺麗に立っていた。

妖精弓手の胸を見ながら言う。

「凄いな……他の皆の胸と比べると綺麗な形だ」

「ちよー！こんな時に他の女の子の事を言わないでよ！バカ！まさか他の女子と……シタの？」

「ああ、お前も知っているパーティーの女たちと俺の幼馴染だ」

「ま、マジで……うそーん、全く……アンタって人は……そ、それで……どう？私のおっぱいは？」

「言っただろう？綺麗な形だって……」

そう言ってソルジャーは妖精弓手を地面に寝かせる、つとその前に、地面に布を敷いて、身体に泥がつかないようにした。

準備が整い、ソルジャーは彼女を布の上に寝かせて、そして彼女の胸に近づく。

最初に乳首を優しく舐め回して、そつと口の中に包み込んで吸う。

「ツ♡ああ♡ ふああああ♡」

「うん…お前の胸、美味しいぞ。とても…」

「も、もう…♡恥ずかしい事言わないで…」

そう言いつつ、ソルジャーは妖精弓手の胸を吸い続け、それに感じる妖精弓手。

「つう…♡つ…♡んっ♡ だ、ダメ…感じちゃう♡」

妖精弓手の感じている様子を見て、ソルジャーは空いている手を今吸っている左胸の反対側の右胸を触り、もう片方の手を彼女のマンコに優しく触れて撫で下ろす。

「んっくくくくくくくくくくくく！」

「どうだ？気持ちいいか？」

「わ、分かんない！ これ！気持ちいいのかも激しいのかも！」

「大丈夫。時期に気持ちよくなるよ。俺に任せてくれ」

ソルジャーは吸うのをやめて、彼女のマンコに顔を近づける、そして妖精弓手のクリトリスを舐める。

「ひい!!だ!ダメ!!オルクボルグ!!それ!感じる!凄く感じる!!」
「そうだろう? もつと感じさせるよ」

そう言つてソルジャーは妖精弓手のマンコを舐め続け、クリトリスも一緒に舐め続ける。

妖精弓手はかつてない感覚に絶頂を迎えようとしていた。

「だ!ダメ!!!イっちゃう!イっちゃうよ!!!」

耐え切れない妖精弓手は身体を大きく逸らし、そしてその時イってしまふ。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…、い、…イっちゃった」

「なあ…イったばかりで申し訳ないが、俺のもいいか?」

つとソルジャーは立ち上がつて自分の大きなペニスを見せ、それに妖精弓手は起き上がつて見る。

「で、でつか…!あんたのチンオチン…凄くデカいんだけど…」

「すまない、出来るか?」

「ふふふ…あたしに任せて♡」

そう言つて膝立ちで近づき、ソルジャーのペニスを舐める。

「はむっ…ジュル、ジュルジュル…♡」

「う!おおく…!いいぞ…!」

「ウフツ、あたしの口に参っちゃいなさい♡」

妖精弓手は舐めるのをやめて、次はソルジャーのペニスをしゃぶりつく。

「ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡」

「おおく…!!うまい!うまいぞ! ハイエルフは種族を増やす為にこれを習ってるのか?」

「ち、違うわよ! 別に好きで覚えた訳じゃないし…。ねえ、そろそろこっちにして?」

つと妖精弓手は寝転がって、マンコを自分で広げて見せる。

それにソルジャーは微笑んで言う。

「ああ、もちろんだよ」

ソルジャーはペニスを掴み、彼女のマンコに近づけて、そしてゆっくりと入れる。

「くっ!くっ!くっ!くっ!くっ!」

「行くぞ…ふっ!」

ソルジャーは妖精弓手の腰を掴み、一気に突っ込んで、妖精弓手の処女膜を突き破る。

「いつつううううううううううううううううううう!!!!」

「い!痛かった!?!」

「う…い、痛いわよ…! 一気にやったら…! もっと優しくしてよ…」

「す、すまない…。でも今度は優しくするよ。しばらくはこのままでもいいか?」

その事を妖精弓手に問い、それに妖精弓手は頭を横に振る。

「そんな事しなくていいから、ほら…動きなさいよ」

「すまない、それじゃあ」

そう言つて腰を動かし始めるソルジャー。

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

彼のペニスが妖精弓手の膣の中を動き回り、子宮口の入り口に当たり、妖精弓手は感じる。

「あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡す♡凄いい♡気持ちいい…♡」

「いいか…？俺のビックボウは？」

「いい♡凄すぎて♡もう♡意識が♡飛んじやいそう♡」

そう言つて感じ入る妖精弓手、そして互いの汗が身体中から出て、良い感じの身体に仕上げていく。

そしてソルジャーが限界を感じてくる。

「やーやばい…そろそろ行くぞー！」

「うん♡来て♡中に♡中に出していいから♡」

「ああー！そうさせて貰うー！」

その言葉と同時に一気に腰を突き上げ、ソルジャーの精子が妖精弓手の子宮に注がれていく。

ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！

「ぬうああああああああああああ!!!!」

妖精弓手は思いつきり身体を反らし、ソルジャーの精子の勢いが収まると、ソルジャーは妖精弓手の上にもたれかかれ、それに妖精弓手は手をソルジャーの背中に回して抱きつく。

二人は互いに見つめ合い、そして深いキスをするのだった。

セックスが終えた後、二人はその場で寝そべって、共に毛布を巻いていた。

「本当にするとは思わなかったな、あんたとセックスなんて」

「意外だったか？」

「超意外、でも…とても良かったし、悪くもなかった。ありがとう」

その言葉に笑みを浮かべせるソルジャー、すると妖精弓手は気になっていたことを言う。

「ねえ、この事…あの二人には絶対に言わないでよ？」

「ああ、ドワーフにリザードマンだろう？ 絶対に言わないし言うつもりもない。だから安心しろ」

「よかった…」

妖精弓手は微笑みながらソルジャーに抱きつき、そして耳元で言う。

「またしよう、ソルジャー」

「っ！お前…」

ソルジャーは妖精弓手が自分の名を言ったことに振り向く、妖精弓手はすでに寝てしまつて聞けなかったが、それでもソルジャーは妖精弓手が素直になつてくれた事に嬉しく感じるのであつた。

可愛い子達への快樂 その1

特別部屋での研究場でソルジャーがある物を作っていた。

それはとあるリモコンであり、何やら複数のボタンがあつたが、赤と青だけのボタンだけ大きいのがあつた。

配線を繋いで、リモコンの蓋をして閉じると、ソルジャーは一息つく。

「ふう…、出来たー！」

そこに牛飼娘が来て、それを見る。

「なにそれ？」

「これか？ これはあの寝室に転送する事が出来る装置、名づけて！『どこでも寝室転送装置』だ！（名前が決まらなかったからこれにしたけどね）」

「あ、あははは…。そ、そうなんだ（なんか…とても変な名前…）」

牛飼娘はソルジャーがつけた妙なりモコンの名前を聞いて苦笑いをするしかなかったが。そしてすぐにその装置の事を聞く。

「ねえ、どうしてそれが寝室の装置って事になるの？」

「ああ、これはな、何時も叔父さんが居ると皆と一緒にここに連れてくる事なんて出来な

いだろう？　だから寝室のみ転送出来る様に作る為に作ったんだ。

勿論これは俺がこのケミストビルダーツールタブレットで作った物だから可能な物、そして試しにこの石を転送させてみようか？」

ソルジャーが持つてきた石を台の上に置いて、そしてその石に設定する為、リモコンのボタンを操作して、転送させる為に赤いボタンを押す。

すると石が光の粒子と共に消えて行き、それに牛飼娘が驚いた。

そして隣の寝室に向かい、戻つてくるとソルジャーの手元には先ほどあつた石があつた。

「嘘!?　マジックなの!？」

「いやいや違うから…、本当に転送出来る事が可能なの。それにもう皆に隠す必要がなくなつたから」

「隠すつて…まさか皆に話したの？　神様に使いの」

「いや、もつと凄いのだ。お前にも話す」

つとソルジャーは自分が転生者である事を牛飼娘に話し、それにまたしても驚いたがすぐに冷静になつて言う。

「そつか…そんな事だったんだ。でももう隠さないつて事は私にはもう隠し事は無いつて事だよな？」

「ああ、そうだ。もう隠し事はない。すまない…本当に」

「全くもう…でも、許してあげる」

そう笑顔満載で言う牛飼娘、それにソルジャーは牛飼娘の心の器の広さに感謝をするのだった。

すると牛飼娘はソルジャーのほうを向く。

「ねえ、また皆とエッチするの?」

「お前も大胆になったな、ああそうだな…今度はエルフの奴も呼ぼう」

そしてソルジャーは辺境の街で女神官達と妖精弓手を呼び出して、誰もいない道の裏に集めていた。

「ソルジャーさん、なにをするんですか?」

「今から試したいことがある。いいか?」

「良いけど…どうするのよ」

妖精弓手が問うと、ソルジャーはどこでも寝室転送装置を取り出す。

「見てろよ…」

ソルジャーはどこでも寝室転送装置の転送人数を女神官達と妖精弓手、そして自分だけ設定して、転送ボタンを押して転送する。

するとソルジャー達は光の粒子と共に転送され、特別部屋である寝室に着いた。

そこには牛飼娘が居た。

「ここは…」

「ソルジャーさんのあの部屋の…」

「嘘何ここ!?! オルクボルグ! 何よここ!?!」

「俺の特別部屋の寝室、ここで幼馴染や神官達とシテるんだよ」

つとその言葉に皆が真つ赤な顔で俯いて、それに妖精弓手が驚く。

「うそ!?! そうだったのね…」。オルクボルグ、後でこの事、たつぷりと説明させてね
?」

「ああ分かったよ」

「ねえ、皆。折角来たんだから…シよつか?」

牛飼娘の言葉に女神官達と妖精弓手は真つ赤な顔になるも、それに思わず頷くのだつた。

そしてソルジャー達が全裸になり、牛飼娘、女神官、女武闘家、女魔術師、そして妖精弓手が恥ずかしながらも胸やマンコを隠さずに立っていて、ソルジャーのデカくなつたペニスを見る。

「うわゝ…相変わらず大きい」

「オルクボルグ、いや…ソルジャーのそのデカイチンポには呆れかえるわね、どうやつたら大きくなるのよ」

妖精弓手の言葉にソルジャーは苦笑いする、その時に女神官達は妖精弓手の言葉を聞いて振り向く。

「貴女…ソルジャーさんの事を」

「ええ、冒険やあの二人の前では言わないけど、ここまでしておいて呼ばない訳にはいかないでしょう？」

「でも嬉しいです、ソルジャーさんの名を言ってくれるのは」

女神官の言葉に妖精弓手は照れてしまう。

そんな中でソルジャーはある薬を取り出す、それは牛飼娘や女神官達に見せた分身の薬だった。

分身の薬を見た妖精弓手は首を傾げながら見る。

「なにそれ？ どこか具合でも悪いの？」

「これは分身の薬だ、彼女達にも見せたがこれは身体を分身にさせる他に意識も分ける事も出来る薬だ。複製が出来ているからこれを2粒を飲むと2人出てきて3人、5粒飲むと5人出て来て6人となるんだ。

今回は5人だから体力がいくらあっても足りない、今日はこれを使おう」

そう言ってソルジャーは分身の薬を4粒飲む、すると身体が光り出して、それに皆は思わず目をつぶる。

するとソルジャーが5人になり、それに皆は思わず驚いた。

「凄い……本当に増えちゃった！」

「それを見ると本当に何でもアリって思っちゃう……」

『『『『はははは、凄いだらう』』』』

「同時に喋らないでよ！なんか怖いわ！」

5人同時に喋るソルジャーに妖精弓手が怒鳴る。

「すまないすまない、それじゃあ……いいか？皆」

つとその言葉に皆は頬を赤くして、少しばかり間を空けて頷く。

5人となったソルジャー達は牛飼娘、女神官、女武闘家、女魔術師、妖精弓手を1組に組ませ、互いに愛情深いキスをする。

「ちゅ…♡ちゅちゅう…ちゅ♡」

「ちゅう…♡、そ、ソルジャーさん…♡」

「ちゅぱ…んっ、ちゅ…♡」

「んっちゅぱ♡、はあ…ちゅ♡」

「ちゅ…ちゅ…ちゅ♡、もう…大胆過ぎ…♡」

皆はソルジャー達のキスに完全に参っていた、そしてソルジャー達はキスしながら皆の胸を揉み、それに感じる皆。

「あああん…♡」

「ソルジャーさん…♡」

「か、感じます…♡」

「ゆっくり揉んでよ…♡」

ソルジャー達5人が彼女達の胸を吸い、彼女達はより感じている。

「んっ…♡ ああああ…♡ おっぱいいい♡」

「んああん…♡ 凄いです…♡」

「そ、ソルジャーさん…♡ 美味しいですか…♡」

「あああん…♡ もう赤ちゃんみたい吸って♡」

「大きい赤ちゃん♡ そんなに吸ってたら本当に赤ちゃんが欲しくなっちゃう♡」

牛飼娘達はソルジャー達の頭を優しく撫でて、ソルジャー達も抱きつく様に腕を回す。

「あら〜？ あんた甘えるように抱きついちゃって、ホント可愛いんだから♡」

「でもソルジャーさんなら構いませんよ」

妖精弓手と女魔術師はそう言ってソルジャー達の頭に腕を回して抱き寄せる。

「あらあら、皆も大胆だね」

「でもわからない気はしませんね。もう私達…ソルジャーさんの愛に溺れましたから♡」

「そうね♡ それも深い愛に♡」

牛飼娘と女神官と女武闘家は微笑みながらソルジャー達が胸を吸っている姿を見る。

「ふう…なあ皆。そろそろいいか？ 皆のマンコも俺がいらなくらい濡れているだろう？」

それに皆は頷き、すでに濡れて溢れているマンコを触り、そしてベッドに寝転がってソルジャー達に言う。

「『『さあ、私達をいっぱい愛して♡』』」

その言葉にもうブレーキが効かないソルジャー達は牛飼娘達に抱きつくのであった。

可愛い子達への快樂 その2

牛飼娘達に完全にブレーキが止まらないソルジャー達、5人のソルジャー達は牛飼娘達と熱いキスをする。

「ちゅ…ちゅう♡ ちゅば…ちゅ♡」

「んっちゅ♡ ちゅちゅっ♡」

「うっちゅ♡ちゅくくくくく♡」

「っちゅ♡ちゅちゅちゅ♡」

「ちゅるるるるるく、ちゅ♡」

猛烈に熱いキスをする牛飼娘達にソルジャー達はすぐに自分のペニスを皆に見せる。

たくましいソルジャー達のペニスに牛飼娘達はうっとりする。

「うわく…♡」

「たくましいです♡」

「では始めましょう」

女武闘家が皆にそう言つて、牛飼娘達はソルジャー達のペニスをしゃぶり、5人同時のフェラチオをする。

牛飼娘は根元まで深くしゃぶり、女神官は一生懸命にしゃぶって、女武闘家と女魔術師は舌を使いながらしゃぶって動かし、妖精弓手は手を使いながらしゃぶりペニスを気持ちよくする。

「じゅぷ…じゅぱ、レロ…ジュルルル…」

「ジュパ、ジュパ、じゆるじゆるじゆるじゆる」

「アムツ、レロ♡ ジュルジュパ♡」

「ジュルルルルル♡ ぷはっ♡もう…こんなに固くしちやって♡」

妖精弓手は手コキをしながらソルジャーのペニスを上下に動かし、次に牛飼娘が大きな胸でペニスを挟み込む。

「今度は…君の大好きなおっぱいで気持ちよくしてあげる♡」

牛飼娘は胸でペニスを挟み込みながら上下に動かし、胸の肉厚に快感になる。

それにソルジャーは感じる。

「おお…いいぞー！」

「すっごいわね、どれくらいあるのあのおっぱい？」

妖精弓手は牛飼娘の胸を見ながら女神官に問い、それに女神官は困る表情をする。

「さあ…、私も聞いた事はないので」

「そうなの？ねえ！どれくらいあるの！」

妖精弓手は牛飼娘に大きな胸のサイズを聞き、それにはちよつと困る顔をする。

「さ、さあ…。私15の時から胸が大きかったから。それからかな?」

「ええっ!? その時から!? 羨ましい〜!」

ただでさえ胸が小さい妖精弓手は片手で自分の胸を触りながら悔しがり、その様子を見たソルジャーは妖精弓手に問う。

「なあ、一時的だが胸を大きくする薬あるぞ?」

「えっ!? 本当に!?」

「ああ、実は神官や武闘家に渡そうと思つて作つたんだ。綺麗な形をしているけど、ちよつと気になっている所があつたから」

「あつ。分かつちやいましたか?」

「えへへ…。ええ…。実はソルジャーさんの幼馴染の胸を見た時からつい…」

つとずつと胸の気にしていた事を言う女神官と女武闘家、それには牛飼娘はやや気まづい状況になる。

「あ、あははは…。ごめん皆」

「あ! ごめんなさい! 貴女の事を攻めている訳じゃ!」

「いや、それなら俺も悪いんだよ。言わなかつた事を言つてしまつて…」

「そうね、ソルジャー。あんたも同罪ね♪」

つと面白く言う妖精弓手はソルジャーの頬にキスをする。
なぜかそれに女魔術師は見る。

「理由がわからない…。ねえソルジャーさん、もう皆さん濡れてますから…。ね？」
女魔術師はソルジャーに濡れているマンコを見せながら言い、それにソルジャーは皆に問う。

「ああ、それじゃあ皆、いいか？」

それに皆は先ほどの様子から一変し、頬を赤くしながら頷いてベッドに寝転び股を開かせる。

ソルジャー達はペニスを掴みながらベッドに寝転がる牛飼娘達の股を近づき、マンコの入り口に合わせる。

「もう〜焦らさないで〜。早く〜♡」

「ソルジャー／さん♡」

牛飼娘達の待ちわびている様子にソルジャー達は頷きながら言う。

「分かった分かった、待たせたから行くぞ〜…」

「ゆっくり行くからな」

そう言ってソルジャー達は彼女達のマンコの入り口に当てて、そして腰を下ろして、ゆっくりと挿入する。

「「「「つゝゝゝ〜！」「」」」」

それに皆は徐々に感じて、そしてソルジャーのペニスは根元まで完全に入った。

「「「「ぬうあああああ！ は、入った…♡」「」」」」

ソルジャー達の極太ペニスに完全に堕ちている皆、ソルジャー達は互いの顔を見て頷く。

「よし、行くか」

「おう」

「皆を…」

「たくさん」

「気持ちよくさせなきゃな」

そう言ってソルジャー達は腰を動かし、牛飼娘達を気持ちよくする。

極太ペニスに牛飼娘達は完全に快樂に堕ちていた。

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

「ああ♡ ああ♡ いいっ♡ いいっ♡」

「すっ♡ 凄い♡ ソルジャーさんの♡ おつきな♡ おつきなチンポが♡ 擦れる♡」

「あん♡ あん♡ あん♡ あん♡ あん♡ す♡ すっ♡いい♡」

「そ♡ ソルジャー♡ もっとして♡」

皆の顔が徐々にアへ顔となり、それにソルジャー達は頷いて、牛飼娘以外の皆を抱き上げる。

女神官は四つん這いにしてバックで挿入し腰を動かし、女武闘家はソルジャーが寝て騎乗位にして腰を突き上げ、女魔術師は壁に手をつけて立ちバックで攻め、妖精弓手はソファーでソルジャーが座り、対面座位にして腰を動かした。

「どうだ？これは気持ちいいだろう？」

「は♡はい♡ これは♡ 気持ちいいです♡」

「もう♡ソルジャーたら♡ 変態な事考えるんだから♡」

女神官と妖精弓手は体位を変えたことにより感じて、ソルジャーは上で腰を振っている女武闘家の胸を見る。

上下に揺れる胸がまた美しかった。

「凄いな、胸が可愛らしく揺れてる」

「いやん♡ ソルジャーさん言わないで♡」

そして女魔術師は立ちバックで後ろから突き上げているソルジャーに同時に胸を揉まれていて、耳元で言う。

「これだけ大きかったら、本当に母乳が出るな」

「あああん♡ 本当に出たら、飲ませてあげる♡」

「大丈夫だ、今それを出すための薬を作っている所だ」

「もう♡ ドスケベ♡」

それにより女魔術師は感じ、正常位で手を繋ぐ牛飼娘は皆を一目見たあとにソルジャーに語る。

「ねえ、もう皆君のオチンチンに夢中みたい♡」

「その様だ。それとそろそろ限界だ…!」

「うん♡ 来て…♡」

皆もそろそろ限界が近いためにソルジャー達は一度集め、牛飼娘達を囲む様に正常位で行い、そして腰を素早く動かす。

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン♡

「「「うおおおっ!!!そろそろ行くぞ!!」」」

「うん♡来て♡」

「私達に♡」

「愛情たくさん♡」

「子宮に子種を♡」

「いっぱい注いで~~~~♡そして♡」

牛飼娘達はソルジャー達を見ながら笑顔満載で言う。

「「「赤ちゃん出来ちやうくらい出して~~~~♡♡♡♡」」」

「「「うおおお~~~~!!!」」」

その言葉を聞いて、ソルジャー達は一気に腰を突き上げ、そのまま子宮に自分たちの精子を注ぎ込んだ。

ドピュー・ドピュー・ドピュー・ドピュー・ドピュー・ドピュー・ドピュー・ドピュー・ドピュー・

「「「ぬうああああああああ!!出てる~~~~!!」」」

今までにない大量の精子が牛飼娘達の子宮に注ぎ込まれ、そして精液の勢いが収まり、ゆっくりペニスを抜くと大量の精液が牛飼娘達のマンコから溢れ出てくる。

ソルジャー達は少し呼吸を整え、牛飼娘達と見つめ合い、そしてキスをするのだった。

そして分身の葉の効果が切れて、ソルジャーは1人に戻り、ベッドで牛飼娘達がソルジャーに寄り添っていた。

「ふう…気持ち良かった」

「そうですね。もう幸せいっぱいです」

「でもソルジャーさんは最後勢い強すぎですよ」

「そうね。私も最後は意識が飛ぶかと思いましたがよ」

「それでもかなりの量の精液ね。出来ちゃいましたよ」

皆は笑顔満載な顔でソルジャーにそう言い、それにソルジャーは笑いながら言う。

「ははは…それはそれで嬉しいな。そうだ…この部屋をもう少し拡張しようかな？　そして温泉も作ろう」

「温泉…ですか？」

「あら良いわね！　それなら全員入ってそのまましちゃうなんて事もありかもね♪」

妖精弓手が冗談な言葉を言い、それにソルジャー達は苦笑いをし、牛飼娘はソルジャーの方を見ていう。

「ねえ、また皆でしよっか？」

「そうだな。皆でまたしよっか？」

それに皆は頬を赤くしながら頷いて、そして全員でソルジャーにキスをするのであった。

神官と上森人のご奉仕

とある森でソルジャーが斧を持って木を切っていた。

それはとても太い木であり、それを丸太にする最中だった。

「よっころっせー！」

バシユ!!!

斧を豪快に振り、上手く木を切り倒す、大きな木はそのまま倒れ込み、地面に叩きつけられる。

ソルジャーは切った太い木を一気に切って、複数の丸太にして、自ら持って来たマシンツールタレットを使って、大型トラックの積荷に載せる。

丸太をロープで固定し、ひと仕事を終えたソルジャーはすぐにトラックに乗り込んで、進める距離まで進んで牧場へと戻る。

この丸太は今牛小屋が相当傷んでいる所があつて、その修理に使うものだった。当然柵にも使う予定である。

「さてとく……これを近くまで運んだ後は荷車に載せて行くか。しかし随分と時間をとってしまつたな、もう夕暮れだ、しかも雲行きも怪しい」

ソルジャーは空を見ると夕暮れで、それも空が曇つてきて雨が振りそうな気配であつた。

このまま進めば雨で丸太が濡れてダメになつてしまふ、それを考えるとソルジャーは進むのをやめた。

「仕方ない。今夜はここで野宿でもするか、丸太が濡れたら大変だ」

そうぼやいてソルジャーはトラックから降りて、マルチツールタブレットから防水シートを取り出して、丸太の上にかぶせる。

ロープで縛り、トラックを隠して周囲にセンサーキャッチを打ち込んで、近くの大きな木に近づいて、そこに大きな穴を作つて野宿の準備をする。

そして大量の木を持ってきて、そこに焚き火を付け、料理の準備をする。すると外では雨が降り始め、その様子を見る。

「おお、降つてきたな？　夜は動くとは危険だし雨で見づらいから野宿して正解だな」

つとそう言つてソルジャーは肉を取り出して、フライパンに載せて焼き始める。

香ばしい匂いが周りに漂わせ、肉をその場で切つて細かくして、最後に前の世界でよく使っている焼肉のタレをかけたら完成。

美味しそうな匂いがソルジャーを誘い、それにソルジャーは肉を取って食べる。

「んんんんん!!美味い!! やっぱりタレはこれに限る!」

肉を美味しそうに食べるソルジャー、そして肉を全て食べた後に野菜を取り出し、それを食べたあとでソルジャーは飲み物を取り出そうとしていた。

するとセンサーキャッチが反応し、ソルジャーに警報を知らせ、それにソルジャーはHK45カスタムを掴む。

入り口の方に近寄り、構えると同時に2人の女性が衣服が濡れた状態で入ってきた。

「すいません!少し雨宿りさせてください!」

「ほんの少しだけ…あら? オルクボルグ?」

「あつ、お前ら…」

ソルジャーは入ってきたのが女神官と妖精弓手の2人だった事に驚いていた。

突然やってきた女神官と妖精弓手をもてなすソルジャーは二人にタオルを渡して、濡れた身体を拭かせていた。

「ごめんね、いやゝあんたがいたなんて思わなかったわ」

「俺もだよ、まさかお前らがこんな所にいるなんてな。大体どうしてここにいるんだ？」
ソルジャーは暖かいコーヒーを入れながら気にしている事を問いかけ、それに女神官は話す。

「実は私達もつと冒険の知識を覚えようと2人で冒険に出ていたんです。後の2人は用事で来られないとの事で…」

「なるほど…、しかしここに居たのが俺で良かったな？ 知らない奴だったらお前ら襲われてるぞ」

「む！確かにそうね…。ところでオルクボルグはどうしてここに？」

妖精弓手はソルジャーにここに居る事を問い、それにソルジャーは答える。

「実はウチの牧場の牛小屋と柵が傷んでな、それを修理する為の丸太を取ってきていたんだ、今は近くに隠して雨に濡れないように防水シートを被せてある」

「へ〜！凄いですね！」

「ふ〜ん、何でもやるのねあんた」

「まあな、しかしお前ら…雨具は持ってこなかったのか？」

ソルジャーは二人にコーヒを渡しながら冒険には必須の雨具が無い事を問い、それに2人は言いづらそうにして、女神官が言う。

「じ、実は…持つてくるのを忘れてしまつて…」

「……はあ、冒険には必須だぞ？」

「わ、分かつてるわよ…たまたま忘れてただけ。そうだわ！ ねえ、丁度焚き火があるから乾かしてくれる？ 今から服脱ぐから」

つと妖精弓手はすぐに服を脱ぎ始め、それに女神官は慌てる。

「はわわわわ！ 何してるんですか!？」

「何つて服脱いでるのよ、別に隠す必要ないわよ、もう彼とは何回もエッチしてるんだし。それにあなたも脱げば？ 濡れたままじゃ風邪引くわよ」

その言葉を言われた女神官は顔を真っ赤にし、恥ずかしがりながらもソルジャーの方を何度も見ながら自分の服を脱ぐのだった。

そして服を脱いだ2人は服を木に干して焚き火の近くに置き、全裸になつた女神官と妖精弓手の姿をソルジャーは思わずガン見していた。

2人の無駄のない身体、贅肉のないスタイル。そしてなによりいつもより可愛らしいピンク色の乳首にうっすらと見えるマンコの毛、思わず生唾を飲み込む。

つと女神官と妖精弓手は見ているソルジャーに気付いて、妖精弓手はわざとらしく見

せびらかす様にする。

「もう、じつと見てきて、変態ねホント」

「ソルジャーさん…」

「すまん、あまりにも魅力的だったから」

「ふふふ、ありがとう♡ ねえオルクボルグ…あんたも脱いでよ、もうピンピンに勃ってるんでしょ?」

そう言う妖精弓手の言葉にソルジャーは苦笑いしながらズボンの方を見る。

彼女の言う通り、既にズボンからテントが張らてあった。

「そ、ソルジャーさん…しませんか?」

つと女神官が下から目線で言ってきて、それにソルジャーはお言葉に甘えて、服を脱ぎ始めて全裸になるのだった。

「はむ、じゆるる。ペろ…じゆるじゆる…♡」

「ジュールジュール、ジュールジュール…♡」

二人の上手いフェラチオにソルジャーは感じていて、そして二人の頭を撫でる。

「ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡」

それに2人は微笑みながらしゃぶり続け、そして自分のマンコでオナニーをしながら完全に濡らしていた。

ソルジャーは2人が完全に濡れている事に気付き、二人に言う。

「なあ…そろそろいいか？」

「は…♡」

「ふふふ、いつでも来なさい♡」

そう言つて2人は共に寝転がると思いきや、仰向けになつた妖精弓手の上に女神官が四つん這いになり、それにソルジャーは彼女達の体位に思わず興奮する。

「ほう、これはまた良いな…それじゃあ」

ソルジャーはペニスを女神官のマンコに入れる、それに女神官は感じる。

「ぬうあああああ！」

「よし！行くぞー！」

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

腰を動かして、女神官のマンコを味わいながらペニスを膣内で感じさせる。

「あん♡ あん♡ いいっ♡ ソルジャーさん…♡」

女神官は感じながらうっとり顔になり、そして一旦止めて抜いて、妖精弓手のマンコに入れる。

「ぬああああ！入っちゃった♡」

「次はハイエルフだ、しっかりと感じさせてやるぜ！」

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

ソルジャーは先ほどと同じ様に腰を動かし、妖精弓手の膣内を気持ちよくする。

妖精弓手もうっとり顔になりながらソルジャーのペニスを感じていた。

「あん♡ あん♡ あん♡ ソルジャー♡ ソルジャー…♡」

2人のマンコを交互に出し入れしながら替えて、そしてソルジャーのペニスが絶頂に達する。

「そ！そろそろ行くぞ…！」

「はい♡ 来てください…♡」

「あんたの濃い精液、たくさん出して♡」

その言葉を聞いてソルジャーは最初に女神官のマンコに射精して、それに女神官は身体を反らす。

ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！

「ああ〜♡出てます…♡」

そして自らの意思で何とか止めて、すぐに妖精弓手のマンコに移り、射精を再開する。
ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！ドピュ！

「ふああああああ♡ つ、強すぎ〜…♡」

妖精弓手は女神官と同じように身体を反らし、射精が止まるとゆっくり抜いて、2人のマンコから精液が出てくるのだった。

「はあ〜…：…気持ち良かった♪ それにしてもあんたの精液は凄いわね♪」

「はい…、とつても気持ちよかったです♡」

女神官と妖精弓手はソルジャーに抱きつきながら寝ていて、毛布をかぶりながらソルジャーは2人を見る。

「ははは…俺も気持ちよかったよ、それじゃあそろそろ寝ようか。明日は朝一に戻らなくちな」

「そうね。私達もギルドに戻って報告しなきゃ」

「それじゃあソルジャーさん、お休みなさい」

そう言つてソルジャー達3人はその場で寝て、疲れた身体を休めるのであった。

幼馴染のお乳体験

牛飼娘と共に特別部屋に向かったソルジャー、そしてその寝室に入ると同時に互いに抱き合ってキスをする。

「ちゅっ……ちゅちゅっ……ちゅ」

熱いキスをする中で2人は服を脱ぎ始め、ズボンやシャツ、下着を脱いで、全裸となる。

牛飼娘の巨乳を見て、ソルジャーは彼女の胸を優しく揉む。

もみもみ…。

「あん…♡んっ…ああ………ああん♡」

いつ揉んでも柔らかい牛飼娘の巨乳、そしていつ乳首から母乳が出てもおかしくない。

つとその時ソルジャーは思い出した。

「そうだ、ちよつと待ってて」

そう言つてソルジャーは部屋を出て、その様子を牛飼娘は見つめる。

そして戻ってきたソルジャーはある薬を取り出す。

ソルジャーが持ってきたのは母乳が出る薬だった。

それを見た牛飼娘は頬を赤くしながら見つめる。

「もう…試したいの?」

「ああ、いいか?」

「うん…いいよ♡」

彼女の許しがした事により、ソルジャーは一粒のカプセルを出す。それを牛飼娘に渡して、それを受け取った牛飼娘は飲む。

「ッ…」

つと牛飼娘は少し苦しそうな表情をしてしまう。

すると彼女の巨乳が少しはって、乳首から白い液体…母乳が出てきたのだ。

巨乳から母乳が出てきたの見て、牛飼娘は思わず胸を見る。

「うわ…本当に出たね? ねえ。飲んでもいいよ」

「いや、ちよつと待て」

ソルジャーはすぐには飲まずに、まず最初に牛飼娘の後ろに周り、後ろから彼女の巨乳を揉む。

すると母乳が勢いよく出てくる、しかし途中で母乳の白い液体に少し赤い色も混じっていた。

そう、この赤い色は牛飼娘の血で、薬の影響で胸がはった際に血も混じってしまったのだ。

「これ…」

「ちよつとした副作用かな？ でも心配ない。すぐに副作用は消えるさ」

その言葉通り、赤い色はすぐに消え、白い液体：母乳に色になる。

ソルジャーはそれを見ると、すぐに牛飼娘の前に回って、彼女の乳首を吸う。

そして優しく母乳を飲み、牛飼娘は感じながらもソルジャーの頭を優しく抱きしめる。

「んっ…♡んあ…♡」

ゴク…ゴク…ゴク…ゴク…ゴク…

喉を通す音を鳴らせながら母乳をしつかりと味わうソルジャー、そして一度乳首から離して、牛飼娘を見つめ合い、またキスをする。

「ちゅ…ちゅちゅ…ちゅっ…ちゅ♡」

「ん…、なあ…いいか？」

「え？ うん…」

その事に頷く牛飼娘はその場でしゃがんで、ソルジャーのペニスを舐める。

「れろっ…ぺろぺろ…ちゅ」

ソルジャーのペニスをきれいに舐める牛飼娘、そして舐めた後にソルジャーのペニスをしゃぶる。

「ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ、ジュパ」

牛飼娘はもう慣れた手つきと動きでソルジャーを気持ちよくさせ、ソルジャーは牛飼娘の頭を撫でる。

そしてソルジャーは牛飼娘に言う。

「なあ、一度ベッドに行こう」

「うん…」

そう言つてソルジャーと牛飼娘はベッドの方に移動する。

ベッドに付いた2人は、ソルジャーが寝転がり、牛飼娘の股を頭にこさせ、牛飼娘は

ソルジャーのペニスを再び見つめる。

「二度こうしたかった…」

そう言つてソルジャーは牛飼娘のマンコを舐めて、それに牛飼娘は感じる。

「んっ~~~~!! か、感じる…! もう〜お返し♪」

牛飼娘もソルジャーのペニスをしゃぶり、互いにペニスとマンコを舐めてはしゃぶる。ソルジャーがしたかったのは『シックスナイン』、男性と女性が互いの股を舐めて愛しあう。

互いの愛も深まり、ソルジャーはマンコを舐めるのやめて、牛飼娘に言う。

「挿れたい…いいか?」

「レロ…うん」

そう言つて牛飼娘は一度身体を起こして、ベッドに仰向けになり、両足を開かせて、ソルジャーがその間に入ってくる。

ペニスを牛飼娘のマンコに当てて、ゆっくりと入れる。

「ぬんんんんんん~~~~!!」

硬いペニスが膣に程よい刺激を与え、ソルジャーのペニスもきつい膣がより刺激を与える。

「ぐっ! いいぞ…それじゃあ動くぞ」

「うん！来て…！」

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

ソルジャーは腰をより効率よく動かし、正常位で彼女の揺れる乳を見る。

乳からは母乳が吹き出して、身体だけじゃなく、辺り一面に母乳にしずくが飛び交う。

「すごいぞ…。胸から出てくる母乳が吹き出てくる」

「あつ♡いつ♡いや〜ん♡ 見ちゃダメ♡…母乳は見るものじゃないよ♡」

「分かってるよ、さて次だ」

ソルジャーは腰を動かすのをやめて、一度抜いて牛飼娘の体位を変える。

正常位から四つん這いにして、後ろからペニスをいれる。

「ん！ぬああああ!!」

後ろから挿れられる感覚は正常位とはまた違う感触、ソルジャーは腰を掴んで腰を動かす。

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

四つん這いからの感覚は先ほどとは違って、より深く入り込んでくる。ソルジャーは挿んでいる腰を離して、胸を挿み、母乳が噴き出してくる。

「ああん♡ダメ♡胸を挿んじや♡」

「大丈夫だ。お前は強い子だから」

そう言つて腰を動かし続けて、ソルジャーと牛飼娘はより気持ちよさの奥に行こうとする。

そして限界がやって来て、ソルジャーは牛飼娘に問う。

「なあ、そろそろイキそうだ！　いいか…？」

「うん♡来て…♡」

許可が下りたことで、ソルジャーは腰をより早く動かし、牛飼娘はそれにより感じる。そして限界が来て、一気に腰を突きつける。

ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！ドピュー！

「ん！んぬあああああああああ！！！！」

ソルジャーの精液が牛飼娘の子宮を叩きつけ、牛飼娘は身体を大きく反らしながら
イっちゃうのだった。

ソルジャーと牛飼娘は一度ベッドに横になり、呼吸を整えながら互いの顔を見る。

そして牛飼娘の胸を見ると、もう母乳は止まっていて、張りも少しおさまっていた。

「どうやら薬の効果は数分程度のようだな」

「うん…でも本当に出たね。ねえ…どうだった？私の母乳」

「ああ、美味しかったよ。俺の研究は成功だ、これなら他のみなにも行けそうだ」

「もうっ♡」

牛飼娘は笑いながら抱きつき、ソルジャーも返すように抱きしめる。

するとソルジャーがベッドの近くにある箱を取って、牛飼娘に言う。

「なあ。こんな状況で言うのもあれだけど…」

「ん？」

牛飼娘はソルジャーの問いに顔を上げて、ソルジャーは身体を起こして持っている箱

を開ける。

それは指輪であり、それに牛飼娘は目を大きく開いて、ソルジャーの方を見る。

「ちよつと遅れたが、誕生日おめでとう…」

「…あ、ありがとう…！」

牛飼娘はその事に嬉し涙を流し、ソルジャーに抱きつき、それにソルジャーも同じように抱きしめ、そして2人は深いキスをするのであった。

神官へのお礼

叔父のガンを治療し、それに一安心したソルジャー、収穫祭まで残り4日、それまでジャベリン達と静かに過ごそうと考えているソルジャー。

そしてソルジャーが街に出てきて、少しだけぶらついていると、女神官と出会う。

「ソルジャーさん」

「神官か。この間は着いてきてすまない」

「いえ…、あれから牧場主さんの容態はどうですか？」

「ああ、もう問題ない。完全に治っているよ」

その事を聞いた女神官はそれにホッとすする。

そしてソルジャーはある事を思い出す。

「そうだ…神官。君だけに用事があつて、時間はあるか？」

「え？はい…大丈夫ですけど…何でしょうか？」

女神官の言葉にソルジャーは頷いて、ある物を取り出す。それは以前使った事があるどこでも寝室転送装置であった。

ソルジャーはそれを使い、女神官と共にある所に転送される。

そして転送された場所は当然特別部屋の寝室、それに女神官は少々困った表情になる。

「もう…ソルジャーさん」

「すまん、他にこれ以外の事が思いつかなくてな。と言つても君もあの日以来うずいてしようがないんだろう?」

つとその事に女神官は思わず黙り込んで顔を赤くする。

実際ソルジャーの言うとおり、妖精弓手と共にシて以来お股がウズウズして仕方なかった。

それにはソルジャーに見破られていて、仕方なく頷く女神官。

「だから俺からのお礼だ。いいか?」

「はい…、私もソルジャーさんとまたしたいです」

真つ赤な顔で言う女神官はソルジャーに近寄り、口を近づけ、ソルジャーもまた口を近づけてキスをする。

「ちゅ…ちゅう♥　ちゅば…ちゅちゅつ♥」

ソルジャーと女神官は甘いキスをしながら抱きつき、既に全裸になっていた。

「そ、ソルジャーさん…。キス…凄いですね」

「お前もだよ…そうだ。これを試してみたい」

そう言つてソルジャーは棚からある物を取り出す。それは胸が巨乳になる薬と母乳が出る薬だった。

女神官はそれを見てソルジャーを見る。

「ソルジャーさん…これ」

「これは胸が大きくなる薬と母乳が出る薬。母乳の方は幼馴染で試したことがあるから大丈夫。胸の方は…いいかな？」

「もう…仕方ない人ですね。いいですよ、試してあげます」

そう言つて女神官は胸が大きくなる薬をソルジャーから貰い、それを飲む。

「う…んっ…!!」

少し苦しうに胸を抑える女神官、すると女神官の胸が徐々に大きくなっていく、少しずつ大きくなり、そして彼女の胸は巨乳へと変化した。

彼女の胸は牛飼娘の胸には及ばないものの、女魔術師よりは大きくなっている。それを見たソルジャーは思わず生唾を飲む。

「ゴクツ…、デカい…これほど大きくなるとは」

「はあ…はあ…、こ、こんなに大きくなるんですか？信じられません…本当に大きくなるなんて…」

信じられない女神官は自分の胸を揉みながら確かめる、プリンみたいに柔らかい胸にゴムの様に弾力がある張り、それを見るとソルジャーも思わず彼女の胸を揉む。

ソルジャーに揉まれた事に感じる女神官。

「ア…んっ…ああ…んああ♥」

「（おおく…幼馴染のあいつよりは弾力がある。柔らかさは同じだけどここまで弾力はない…これは薬の影響か）」

そう思いながらソルジャーは次の薬を女神官に渡す、そう…母乳の薬だった。

女神官はそれを見てソルジャーの方に向きながら頷き、それを受け取り飲む。

「っ…！」

先ほどとは違ってそんなに苦しくはない女神官、そして乳首から母乳が出てきて、それに女神官は見る。

「うわ…ソルジャーさん、私のおっぱいから母乳が…、まだ赤ちゃんを産んでいないの

に」

「これが薬の影響だよ、後まずはこの胸から出る母乳の副作用を出させる」

ソルジャーは女神官の後ろに回り込んで、女神官の胸を揉む、すると母乳から白い液体と同時に薄く赤い液体が混じる。

女神官の血が出てきて、それに女神官はジツと見つめていた。

そしてすぐに血は止まり、女神官はそれにマジマジと見つめて、ソルジャーは前に回り込んで女神官に問う。

「いいか…?」

「はい…どうぞ」

頬を赤くしながら女神官は胸を上げながら差し出し、ソルジャーはそれに甘えるように女神官の胸を吸う。

「う…んあ…♥」

牛飼娘との母乳とはまた違う味で、サラツとしたのどごしに甘くもなく苦くもない味、とても飲みやすい味だった。

ゴク…ゴク…ゴク…ゴク…ゴク…

「も、もう…ソルジャーさん、そんなに音を鳴らさないでください」

「すまん、でも美味しい」

「そう言つてソルジャーは女神官の胸から離れ、ペニスを出して女神官に向ける。
「いいか？」」

「はい…いいですよ、それにおまんこ…もうこんなに濡れていきますから」
女神官はソルジャーにマンコを見せると、もう完全に濡れている状態であった。
それにソルジャーは頷き、ペニスを近づけ、女神官のマンコに触れて挿れる。

「ぬああああああ…！」

ソルジャーのペニスに感じる女神官、そのまま対面騎乗位で抱きつく。

パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥パン♥

「あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥ソルジャーさん…♥」

腰を動かす感触に女神官はソルジャーに思いつき抱きつき、ソルジャーも抱き返す。

更に胸から出る母乳がソルジャーの身体に流れてかかる。

「あつ♥あつ♥あつ♥ソルジャーさん…♥き、気持ちいいです…♥」

「ああ…俺もだ、いいぞ…！」

そしてソルジャーは対面騎乗位から普通の正常位へとさせて、腰を動かし続ける。

手を繋いで、汗ばむ身体が水しぶきがとび、2人の身体は限界に達する。

「そ、そろそろイクぞ…!!」

「来て♥来てください♥ソルジャーさん♥ どうぞ…中に♥」

その言葉にソルジャーは一気に腰を突き上げ、女神官の子宮に精子を流し込む。

ドピュー!ドピュー!ドピュー!ドピュー!ドピュー!

「ふ♥ふはああああああ♥」

女神官の身体は激しくピクつき、ソルジャーに抱きついてソルジャーも抱きつく。

そして精子の勢いは収まり、ペニスを抜いて、女神官のマンコから精子が溢れ出てくる。

もう幸せそうな表情をしている女神官、その女神官の表情をソルジャーは見つめて、そして彼女の胸を見る。

彼女の胸はまだ大きいままだが、母乳の方はすでに止まっている。

「ソルジャーさん……とてもすごかったです」

「ああ、でも……」

ソルジャーはまだ自分のペニスが収まってないようで、ガチガチに勃起していた。

「あ…、ソルジャーさん。まだ出したりないんですか？」

「すまない……どうもその様だ」

「なら……」

女神官は自分の足を広げながらマンコを手で広げて、そこから精液が溢れる。

「私のマンコで……どんだん気持ちよくなって下さい♥」

「すまない……なら遠慮なく！」

そう言ってソルジャーは女神官に飛び込んで、女神官は「キヤア♥」と声を上げながら、ソルジャーとのセックスを3回したのであった。

当然終わった時に胸も元に戻ったのだった。

受付嬢の初めて

ソルジャーは受付嬢を連れて再びギルドの中に入る、屋上の近くの壁によって、受付嬢をもたれさせる。

そしてソルジャーは壁に手をつけて、受付嬢を見つめ続ける。

言わいる『壁ドン』つと言うやつだ、そんなソルジャーの目線に受付嬢は頬を赤くしながら目線を逸らす。

「そ、ソルジャーさん…恥ずかしいですよ。そんなに見つめられると…」
「今はそんな雰囲気なんだぜ？これくらいの目線で逸らす様じゃだめだ、ほら…こつちを向いて」

その甘い言葉に受付嬢はゆっくりとソルジャーの方を向き、ソルジャーは少し微笑みながらゆっくりと顔を近づき、優しいキスをする。

「…ツチュ、チュ…ん、ちゅ」

ソルジャーは受付嬢とのキスをじっくりと堪能し、空いている手を握る。

受付嬢の唇はとつともなく柔らかく、おまけに甘い香りもした、そして少しだけ壁に手を置いている手を受付嬢の胸に移して、服の上から優しく触る。

「っ！」

少しだけ驚いた受付嬢は思わずソルジャーの手を触れるが、すぐに受け入れて、ソルジャーに身をゆだねる。

「…驚いた？」

「…は、はい…一瞬。でも…構いませんよ、これから…する事が分かるんで…どうぞ」

その言葉にソルジャーは頷き、再び受付嬢の胸を触る。

服の上からでも分かる柔らかく大きい胸、ソルジャーは握っている手を離して、両方の手で胸を触り続ける。

受付嬢はそれを感じているのか、少しばかり表情が強ばっている。

「っ…ん、ん…んあ♡」

「あつ、声の事を忘れてた」

つとソルジャーはバックパックからある物を取り出して、ステイック型スイッチを押す。

すると自分たちの周りに透明のフィールドが形成され、それに受付嬢はそれに思わず辺りを見渡す。

「そ、ソルジャーさん…今のは？」

「これは『サウンドキャンセラーフィールド』と言ってな。建物内で誰にも気づかれずに

敵を倒す為に作ったもんだんだ、これで周囲に音が聞こえなくない安心する事が出来る。まあ他にもこういう性行為な感じにも使うんだけどね」

「そ、そうなんですか…初めて知りいました。で、でも…性行為って…まさかエッチな事にも使う予定だったんですか？」

「すまん…。少し余計だった」

「そうです！…でもこれで少しは落ち着けますね、周りの人に気づかれた大変ですから」

つとソルジャーの頬にキスをし、それにソルジャーは微笑んで、キスをする。

「ん…ちゅ、ちゅ…ちゅ、ちゅう…ちゅ♡」

キスをしたあとそして再び顔を離して、互いの顔を見つめたあとにソルジャーは受付嬢のシャツに手を付ける。

ボタンを外して、上着を脱がせ、そして短いスカートに手を付けえ、脱がす。

受付嬢は恥ずかしながらも隠さずに下着姿を見せる、黒い下着…レース下着のブラジャーが一層美しさをあらわにし、更にパンティーのTバックがお尻のラインをきわどかせていた。

「なんてエロい下着なんだ…」

「そんな…恥ずかしいですよ…／／／」

「すまない…それじゃ俺も「あつ待つて下さい」ん？」

ソルジャーが自分も服を脱ごうとした所に受付嬢が止める。

「ソルジャーさんは脱がなくてもいいですよ」

「いいのか？ 俺だけ裸にならずになるとズルいからな」

「構いません。それにソルジャーさんは脱ぐのが大変そうですから」

「すまない…でも武装だけは外しておくよ」

そう言つて武器を下ろし、そしてソルジャーは受付嬢と見つめ合い、ブラジャーに手を付けるのであつた。

誰もいない空間で、ソルジャーと受付嬢は性行為…セックスの真つ最中だつた。

そんな中でソルジャーは受付嬢のブラを外して、受付嬢の胸を見ていた。

スタイルの良い身体の上で綺麗で大きい胸、牛飼娘には程遠いが女魔術師より大きい

胸だった。乳首も桜色で綺麗なもので、とても良い感じの身体だった。

「綺麗だな…」

「そ、そんな…ソルジャーさんは他の人たちしているからそう言うのが上手いだけですよ」

「それでもないさ。なあ…おっぱい吸っていいか？」

「おっぱいをですか？ …は、はい…どうぞ／＼」

恥ずかしそうになりながらもソルジャーに自分の胸を差し出す受付嬢、ソルジャーはゆっくりと乳首に顔を近づけ、そのまま舐めて吸う、

「ジュルジュルチュパ、ジュルジュルジュルチュパ。ジュルルルルル〜」

「んっ〜♡ んなあ♡ そ、ソルジャーさん…お上手ですね」

受付嬢はそう言いながらソルジャーの頭を優しく撫でて、ソルジャーは頷きながら言う。

「んっ…まあな、それよりも美味しいよ、君のおっぱい」

「いやん♡それは言っちゃダメです♡ でもソルジャーさんだから許します♡」

そんな感じにソルジャーは再び受付嬢の胸を吸い、それに感じる受付嬢はソルジャーを優しく受け入れる。

そしてソルジャーは右手をパンティーの方に持ってこさせ、その上から触る。

「んんんんんっ~~~~!!か!感じます……!!」

パンティーの上からでも感じる受付嬢の目を大きく開いて、それに思わず指で口元を塞ぎながら耐える。

その後にソルジャーはパンティーの間に手をいれ、直接マンコに触れて受付嬢を気持ちよくさせる。

「んんん~~~~!!んあ~~~~!」

受付嬢は耐え切れずに声を上げる。

周囲には声は届かないが、それでも声を上げてしまう受付嬢。

そしてソルジャーは胸を味わった後に、パンティーに手をつけて、ゆっくりと脱がす。

完全に全裸となった受付嬢は顔を真っ赤にしながら恥ずかしがるも、隠さずにいた。

太ももまでのパンストのみなっではいるが、それでも全裸に近い状態だ。

「きれいだな…本当に」

「そんな…そるじゃーさ n 「ニユパ」んっ!」

ソルジャーは受付嬢のマンコを舐めて、マンコの割れ目に中心を念入りに舐める。

「んう…ふああん…! ぬん…ああっ!!」

「もう十分に濡れてるな」

一度マンコから顔を離して、マンコの状態をみる。

もう十分に愛液が流れていて、もう準備OKの状態だった。だがまだ足りない。

「すまないが、俺のも頼む」

するとソルジャーは自分の息子であるデカペニスを取り出し、それに受付嬢に見せる。

それに受付嬢は思わず口元を手で隠しながら驚く。

「す、凄いです…そんなに大きくなるんですか？」

「ああ、…舐めてくれるか？」

「…はい」

受付嬢は両膝をついて、ソルジャーのペニスを少し舌で舐めて、そして口の中にふくませる。

「ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…ジュパ…♡」

優しくペニスをくわえながら頭を前後に動かす受付嬢、初めてながら上手く出来ている様子にソルジャーは満足そうになる。

「上手いよ…、初めてにしてはうまいね」

「んば…、そ、そんな事ないですよ…」

「そつか…。それじゃあそろそろいい？」

♡ あっ♡ あっ♡

「どうだ…俺のは気持ちいいか？」

「は♡はい♡ 気持ちいいです♡ こ♡こんなの♡初めてです♡」

正常位でも感じる受付嬢、ソルジャーは胸を揉みながら腰を動かし、それに更に感じる受付嬢。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ そ♡ ソルジャーさん♡ダメですよ♡ おっぱい同時に攻めちゃ♡」

ダメと言われたら余計に攻めたくなるソルジャー、そして受付嬢を起こして、対面座位で上下に動かす。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ っい♡ 更に奥に来てます♡」
「ああ…でもそろそろ限界かも！」

ソルジャーの肉棒が更に大きくなって、その感触が受付嬢にも伝わる。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ わかります♡ ソルジャーさんのオチンチンが大きくなっていくのが♡」

「うおお…!!そろそろ行くぞ！」

パンパンパンパンパンパンパンパン♡

ソルジャーの動きがより激しくなり、受付嬢は絶頂に達する。

「来て♡来てください♡ ソルジャーさん♡今日は♡安全日ですから♡ 中に出しても♡大丈夫です♡」

「ああ！分かった!!」

その言葉と同時に一気に腰を突き上げ、ソルジャーの精子が受付嬢の子宮内に入っていく。

「んぬあああああああああああああああ!!」

ソルジャーを強く抱きしめ、身体を反らしながら精子を受け止める受付嬢。

勢いが収まると、ソルジャーは受付嬢の身体を少し持ち上げ、ペニスを抜くと精液が少しずつ出てくる。血も少しばかり混じっているが、それでも愛の結晶である事は変わりはない。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ソルジャーさん」

ソルジャーは受付嬢と見つめ合い、そして深いキスをするのであった。

新たな場所での… その1

収穫祭が終わった後、ソルジャーはある物に新たな部分を組み立てながら組み込み、特別部屋にいた。

ある物を組み終え、ソルジャーはその物を見る。

「よし…、これで…ポチツとな」

シユン！

すると何かが移った様な音がして、それにソルジャーは振り向いて、確認しながら頷く。

そこに牛飼娘がやって来る。

「何してるの？」

「ん？ああ、これを改良して、今テストを終えたばかりなんだ」

ソルジャーが牛飼娘に見せたのは、以前セックスする為にソルジャーが作った『どこでも寝室転送装置』であった。

牛飼娘はそれを見ると、思わず頬を赤くする。

「あ…、それ…えへへ、なんかそれ見るとなんかシたくなって来ちゃった、ねえ…あの

部屋でしようよ」

「ああ、すまない、あの部屋はもう無いんだ」

「え？」

ソルジャーの言葉に牛飼娘はすぐにあの隠し部屋に行く、するとドアだった部分がなく、何も無い壁となっており、それに牛飼娘はソルジャーの方を向く。

「どうしてあの部屋を失くしたの？　もしかして私達ともうやりたくないの？」

「違うよ。以前この場所の事がおじさんに知られていたらしくてな、もしかしたらあの場所の事もバレると思って、場所を移したんだ」

「え？　移したってどうやって？」

あの部屋を移したことに驚きを隠せない牛飼娘、ソルジャーはそれに微笑みを浮かばせながら言う。

「実はさっきこれを使って転送したんだ、ここよりもっと良くて、異心地がいい場所を」
「？」

牛飼娘はソルジャーのその言葉に頭をかしげる。

そして翌日、ソルジャーと牛飼娘の牧場に女神官と妖精弓手の2人がやって来る。

「ソルジャーさん、居ますか？」

「オルクボルク！居るー!!」

妖精弓手が大きな声で叫び、それに答えるかの様にソルジャーが玄関のドアを開ける。

「聞こえてるよ、どうした？」

「いえ、大した用じやないんですけど…」

「あんたに話したいことがあるの、それとあの子も」

つと妖精弓手が牛飼娘の方に指をさしながら言い、それに牛飼娘は頷きながら立ち上がる。

「うん、いいよ。ほら君も早く早く」

「ちよおい」

そう言つてソルジャーを押しながら牛飼娘は外に出る。

すると女神官がある事を思い出す。

「そう言えば牧場主さんは？」

「叔父さんなら別の街に牛の肥料の素を買いに行つて、明日には戻つてくる予定。それが？」

「で、でしたら…ソルジャーさん」

女神官がそう言うのと頬を赤くしながら腰をクネクネと動かし、それには妖精弓手も頬

を赤くして、股をモジモジしながら言う。

「そ、そうね……。ねえ……ソルジャー」

つとその言葉にソルジャーは笑みを浮かばせながらどこでも寝室転送装置を取り出す。

「いいぞ、実は昨日これを改良してな、昨日テストしておいて良かったよ。それに他の物も加えてあるし」

「何を加えたって?」

妖精弓手がそれを問うと、ソルジャーは指を「チツチツチツ」とさせながら言う

「それを今日見せるさ。行くぞ……」

ソルジャーはどこでも寝室転送装置のボタンを押し、女神官と牛飼娘、そして妖精弓手の4人と共にその場から何処かに転送されていくのであった。

そしてソルジャーたちがある場所に転送されて、その場所に現れる。

そこは以前皆とエツチしたあの寝室で、それに皆は周りを見渡す。

「うわー。本当にあの部屋だ。それはそうと一体どこなのここ？」

牛飼娘がその事を問うと、ソルジャーは壁の近くに寄り、すぐそばのボタンを押す。

すると壁の部分が上にスライドするかの様にながって行き、それに女神官達は思わずそこに向かうと、目の前には薄らと雪が積もった大きな山頂が沢山広がっていて、それに女神官達は見とれる。

「す、すごい…、ここ何処ですか？」

女神官が問うと、ソルジャーはそれに答える。

「ここは以前俺が冒険に来た時にある山頂で吹雪を凌いだ時に居た場所、ここは隠れ家丁度良くて、もしかしたらここに寝室を置けるかなって思ったら、丁度いい感じに置けたよ」

「あんた…運が良いわね」

「まあな」

妖精弓手の言葉にソルジャーは頷きながら言う。

すると何かを思い出したソルジャーは女神官に聞く。

「そう言えばここに来て今思い出したんだが、武闘家と魔術師の2人は来てなかったな。」

2人は用か？」

「はい、2人はちよつと用事で来れないと言つていたので。折角ソルジャーさんとの良
い思い出作りなのですが……」

「仕方ないわよ。それでソルジャー。あんたが言つていた加えたものつて？」

妖精弓手はその事を問うと、ソルジャーはその事に思い出す。

「そうだった、こつちだ」

そう言つてソルジャーは違う壁の方を行くと、そこには何やら少し大きな扉があり、
それを開けて入り、女神官達がその後を着いて行く。

するとそこにはなにやら大きな柵が並べられていて、かごが数個置かれていた。

そしてソルジャーが奥にある扉を開けると、そこには青空が広がり大きな露天風呂が
あつたのだ。

女神官達はそれには思わず驚いたのだ。

「す、すごーい……！」

「お風呂です……」

「わ、私……始めて見たわ、あの時は勢いで言つちやつたけど」

「別にいいさ、そんな事……さあ皆、シたいんだらう？」

つとその言葉に3人は思わず顔を真っ赤にし、そして嬉しそうに頷くのだつた。

皆は脱衣所で服を抜いて全裸になって、風呂に近づくソルジャーは一度女神官達の方を向く。

もうすでにエッチの回数で慣れてしまったのか、ソルジャーの前でも隠さずに可愛くて綺麗な身体を見せてながら立ち、お風呂の前を見る。

「はあく…なんかとても気持ちよさが感じますね」

「裸だからね」

「つゝゝゝ」

妖精弓手は牛飼娘のおっぱいを見ながら、自分のおっぱいを見比べる。

明らかに大きいおっぱい、しかし自分のはつるべた。完全にそれに思わず頭が下がる。

ソルジャーは妖精弓手の様子に気付き、ある物を渡す。

妖精弓手はソルジャーの渡しものに気付き、それを受け取ると、妖精弓手に渡したの
は胸が大きくなる薬、巨乳薬だった。

「あつ、これってあれ？ 前にソルジャーが言ってた」

「そうだ、あの薬。ほら、神官の分もあるぞ」

「もう…ソルジャーさんつたら」

そう言つて女神官はそれを受け取り、それを飲む。

すると女神官は二度目なのか、ちよつとだけ苦しそうや感じになるが、すぐに慣れて
胸がこの前と同じように牛飼娘は劣らない女魔術以上の大きな胸へと大きくなる。

それには牛飼娘は驚いて、妖精弓手は目ん玉が飛び出るほどになる。

「うわあ〜…」

「ふへえ!? 本当におつきくなつた!？」

「ちよつとはきついですけど、二度目なのかそんなに苦しくはないです」

女神官は苦笑いしながら自分の胸をさすり、それに妖精弓手は決心した目で巨乳薬を
見る。

「よし！ ならこつちも覚悟あり！」

そう言つて妖精弓手は巨乳薬を口に入れて飲みほす。するとすぐに効果が現れて、少
しだけ苦しそうな表情になる。

「くっ……い」

少し胸を抑えると徐々に胸が大きくなり、そして女神官と同じくらい大きな胸になった。

妖精弓手は自分の胸を見て思わず大喜びをする。

「うー！わあああああああ〜！ これよ！この胸よ！ ずっと昔から他の皆に胸のことで馬鹿にされて来たけど。ようやく！ようやく夢が叶ったわ！ありがとうソルジャー！」

「礼はいいよ、それでご感想は？自分の胸の感触」

ソルジャーがそれを聞くと妖精弓手は大きくなった自分の巨乳を揉み、感触を確かめながら言う。

「最高だわ！今まで味わった事がない感触！大きい上に柔らかいし凄い弾力！ ねえ！早く触って！」

「いいぞ、皆もいいか？」

それに女神官と牛飼娘は頬を赤くしながら頷き、自分の胸をソルジャーの前に出す。

ソルジャーはまず最初に牛飼娘を揉む、いつもんでも柔らかい胸、何度やっても飽きない。

モミモミモミモミ♡

「う……んっ……っあ♡」

「(柔らかい……よし、次は神官だ)」

ソルジャーは牛飼娘の爆乳から巨乳になった女神官の胸を揉む。

モミモミモミモミ♡

「ア……んっ……ああ♡」

「(くぅ〜！こっちも良い感じだ。さて……最後は)」

女神官の巨乳を揉むのをやめて、最後に妖精弓手の巨乳を揉む。

モミモミモミモミ♡

「んっ……っあ！ す！凄……い……！感じる！ 自分で揉むより！凄……く……！」

「いい感じの胸だ……。幼馴染の胸と神官の胸とも負けないくらいの弾力と柔らかさだ。

よし、俺も」

つとソルジャーは分身の葉を2つが入った袋を取って、その2つを取り出して飲む。

すると、ソルジャーの身体から2つの光が飛び出てきて、2体のソルジャーが現れる。

そして3人のソルジャーは女神官達の方を見ながら言う。

「「さて……3人とも、たっぷり楽しもう！」」

「「はい♡／ええ♡」」

そうやってソルジャー3人は女神官達を優しく抱きしめて、女神官達もそれに抱きし

め返し、じっくり見つめた後 優しいキスをするのであった。

新たな場所での… その2

ソルジャー3人は女神官と牛飼娘、妖精弓手とキスをし、抱きつきながらキスを繰り返す。

「ちゅ…ちゅうちゅぽ♡ ちゅぽちゅ…ちゅちゅつ♡」

「んっ…ちゅ♡ ちゅ…♡ ちゅちゅ…♡」

「っ…ちゅ♡ちゅちゅ♡…ちゅ♡」

女神官達と熱いキスをしながらソルジャー3人は、腕を撫で回しながら胸を揉んだり、お尻を触ったりする。

それに女神官は感じながら震え、牛飼娘は頬を赤くしながら強く抱きつき、妖精弓手は腰をクネクネしながら感じる。

「ぶはっ…、はあ…はあ…はあ…。そ、ソルジャーさん」

「ねえ、あの薬だしてよ」

「ええ、私達…あなたにおっぱいあげたいの」

その言葉にソルジャー3人は更に興奮して、すぐに母乳の薬を取り出す。

そして母乳の薬を3人は受け取り、それを飲む。

女神官と牛飼娘はそれにはもう慣れたのか、感じながら胸を触って母乳を出す。だが初めての妖精弓手は少しだけ苦しい感じになる。

「っ…くー！」

そして巨乳となった妖精弓手の胸から母乳が出てくる、それも少し血が混じった母乳が。

妖精弓手は自分の胸から出た母乳を見て興奮する。

「うわわわ〜、私の胸から母乳が！ でもこの赤が少し混じったもので…」
「副作用の影響だけど、すぐに消えるよ」

ソルジャーの言う通り、血が混じった母乳の色はすぐに消えて、もう真っ白で美味しそうな母乳が流れ出ている。

そしてソルジャー3人は「ゴグリツ！」と喉の音を鳴らしながら、それを見て。

女神官達はその様子を見ながら、胸を手で上げながら言う。

「「さあ、召し上がれ♡」」

「「おう！！」」

ソルジャー3人は女神官達に思っきり抱きつき、流れ出てくる母乳にしゃぶりつく。ジュルジュル…ゴク…ゴク…！ジュルジュル…ゴク…ゴク…！

女神官達の美味しい母乳が口の中にほんのりと広がり、牛飼娘は頭を優しく撫でて、

女神官は両手で頭を抱きしめ、妖精弓手は自分の顔に手を触れながらソルジャーの頭に手を置く。

「す！凄いい…！　こんな感じなんだ…。おっぱいをあげる感じ…。本当に赤ちゃん欲しくなっちゃう」

「もうすぐに欲しいって感じになるよね」

「はい…、身も心もソルジャーさんに捧げたいです」

その言葉にソルジャー3人は吸っている彼女たちの母乳から離れて、ペニスを3人に見せる。

「さあ…しゃぶってくれるか？」

「遠慮は無用だ」

「君たちの好きにしていどうぞ」

「「は〜い♡」」

女神官達はそれにソルジャー3人のペニスへと近づくのだった。

女神官達はそれぞれ別れてながらソルジャー3人の元に行き、ペニスを見る。

最初に女神官は風呂場の近くにしゃがみこみ、完璧に慣れた手つきでペニスをしゃぶる。

「ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡」

「お、おとおおお、いいぞ。上手くなったな」

「ふあい。しよるじやーさんに気持ちよくなつてもらおうと…」

口にくわえながら喋る女神官は再び口を前後に動かしながらしゃぶり続ける。

次に牛飼娘はソルジャーを床に寝かせて、マンコをソルジャーの顔に近づかせ、そのままペニスをしゃぶる。

これは前にやったシックスナインで、どうも牛飼娘はもう一度やりたかった様だ。

「ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡」

「なるほど、これがしたかったのか、よし…なら、レロ…」

「んっく…!!」

ソルジャーが牛飼娘のマンコを舐めて、それに感じる牛飼娘。だがそれに負けないと再びペニスをしゃぶりつく。

その様子にはソルジャーは微笑みながらマンコを舐めながら、牛飼娘のお尻を撫でるのだった。

彼女の様子に何度やっても飽きない。

そして最後に妖精弓手はソルジャーを近くの岩場の椅子に座らせ、ペニスに近づけてしゃぶる。

「ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡ジュパ♡」

もう完璧なしゃぶり具合に、ソルジャーは妖精弓手の頭を撫でながら言う。

「うまいぞ…、そうだ…その調子で」

「レロレロ…、もう…ソルジャーったら♡」

そう言って妖精弓手は再びペニスをしゃぶり、ソルジャーはそれに感じる。

女神官達のフェラチオにソルジャー3人は限界に達する。

「やーヤバイー！いくー！」

ドピュ！ドピュ！ドピュ！

「「んんんんっ~~~~!!」」

ソルジャー3人の精液が女神官達の口に射精し、それに受け止める女神官達。

そして口に受け止める女神官達はゆっくりとペニスから離して、口を開かせると、精液がダラッと垂れてくる。

ちよつとの間、精液をお湯で洗い流す女神官達。

ソルジャーはその様子を見て少し謝る。

「すまない、勢いし過ぎた」

「いいえ、そんな事ありませんよ」

「うん。ねえ…そろそろ」

「こつちにも…挿れて欲しいな」

女神官達は自分たちのマンコを開かせて言い、それにソルジャーは生唾を飲む。

「…いいぞ、それじゃあ」

ソルジャー3人は女神官達を横に並べさせて寝かせ、足を開かせて、自分たちのペニス近づけて、挿入する。

ニユル♡

「「ふああああ♡ 入った♡」」

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡パン♡

正常位でセックスし、ソルジャー3人の腰が動き、女神官と牛飼娘と妖精弓手が感じて、巨乳の胸が大きく動きながら母乳を吹き出している。

「あん♡♡♡ソルジャーさん♡♡」

「いつ♡♡♡いつ♡♡♡いい♡♡♡」

「あつ♡♡♡あつ♡♡♡あつ♡♡♡感じる♡♡♡」

気持ちよさそうに感じる女神官達、するとソルジャー3人はラストスパートをかけるように腰を早く動かす。

パン！パン！パン！パン！パン！

パン！パン！パン！パン！パン！

パン！パン！パン！パン！パン！

どんどん早くなって行くソルジャー3人の腰に、女神官達は限界に達する。

「だ♡♡ダメ♡♡♡♡♡」

「い♡♡イ♡♡つ♡♡ち♡♡や♡♡い♡♡ま♡♡す♡♡♡♡♡」

「ソルジャー~~~~~♡」

そして最後にソルジャー3人は一気に腰を突き上げ、ソルジャー3人の精子が女神官と牛飼娘、そして妖精弓手の子宮に注がれていく。

ドピユ！ドピユ！ドピユ！ドピユ！ドピユ！ドピユ！ドピユ！ドピユ！ドピユ！

「ぎーきたあああああああー！」

「入ってくる~~~~~！」

「ぬうあああああああー！」

女神官達は思いっきり身体を反らし、ソルジャー3人の精子の勢いが収まると、ゆっくりとペニスを抜き、女神官と牛飼娘、そして妖精弓手のマンコから精液が流れ出てくるのだった。

セックスを終えて、ソルジャー3人はまだ存在していて、女神官達を抱き寄せて風呂に浸かっていた。

「気持ち良かったです。ソルジャーさん」

「今日も凄かったね」

「それにしても、お風呂に浸かるのは初めてだけど。こんなに気持ちいものなのね」

「ああ、気分良いだろう?」

ソルジャーのその言葉に妖精弓手は頷き、それに女神官と牛飼娘は微笑みながら見ている。

「ねえ、今度は他の人達にもここを連れて来ようよ」

「もしかして、武闘家達の事か?」

「はい、これがあると気持ちいいですし。良いですよね?」

女神官の言葉にソルジャーは頷く。

「ああもちろんだ、また今度一緒にな」

その言葉に女神官達は微笑みながらソルジャー3人に抱きつき、ソルジャー3人はお

互いの顔を見合って頷くのであった。

素直な武闘家

依頼でカイザーを取り逃がしたものの、何とかオーク討伐を終えたソルジャー。

翌日、ジャベリンとブレイドは街でお土産を買う為に向かい、ソルジャーは破壊された武器を処分する事にした。

ソウルブレード、今まで戦ってくれたことにソルジャーは敬意を示す様に手を胸に当て、黙禱する。

そして黙禱が済んだ後、ソルジャーはソウルブレードを特別部屋のダストボックスに入れる。

このダストボックスは処分とする武器や防具を入れるボックス、入れておくと自動的に消去してくれる物。

「さて…街に行つて何かする事はないかな？」

ソルジャーはそう言つて外に出ると、意外な人物がいた。

それは女武闘家が牧場の前に居たのだ。

「こんにちは、ソルジャーさん」

「よう、どうかしたか？」

「じ、実は…ソルジャーさんにお願いがありまして…」

　　と女武闘家は頬を赤くしながらモジモジしていて、それにソルジャーは何の事かと首を傾げていたが、その様子を見てすぐに察した。

「ああ、そう言う事か」

「は、はい…」

「分かった、それじゃあこつちだ」

　　ソルジャーは女武闘家を連れて裏側に行き、そしてどこでも寝室転送装置を取り出して、寝室へと転送する。

　　そして寝室に到着して、女武闘家は辺りを見渡す。

「あれ？ソルジャーさん。ここってあの寝室ですよね？　何故一体どうなって…」

「ああ、君はまだ知らなかったな。ここは前の特別部屋から移動させて、新しい場所にしたんだ。しかもここは前に冒険で見つけた山頂だ、眺めが良いぞ」

「そうなんですか？」

　　女武闘家は首を傾げていて、まだ納得してない様子。

　　それを見せる為ソルジャーは女武闘家を窓の所へ連れていき、それを見せると女武闘家はその絶景に感動する。

「うわー！凄いですね！」

「そうだろう？ しかもここは温泉もあるんだ」

「温泉ですか？ 私噂でしか聞いた事しかないんで」

確かに噂程度なら聞いたのも無理はない、温泉は普通の冒険者では入れない。

前回は幼馴染の牛飼娘と女神官、ハイエルフの妖精弓手だったから女武闘家は来いていない。

まあ余談はこのくらいにしよう。

「さあ、そろそろいいか？」

「あ、は…はい。お願いします…」

頬を赤くする女武闘家は微笑みながらソルジャーに近づき、ソルジャーに抱き着きながらキスをする。

ソルジャーと女武闘家はベッドに移動し、裸になりながらキスをする。

「チュ♡ チュウ…チュ♡」

キスをしながらソルジャーは女武闘家のおっぱいを優しく揉み、女武闘家はソルジャーの手を掴みながらも彼の思うままにさせている。

更にソルジャーはキスをした後、女武闘家のおっぱいへと顔を近づかせ、彼女のおっぱいを吸う。

「うああああ…♡」

おっぱいを吸われる感触に敏感に感じる女武闘家、そのままソルジャーの頭を撫でおろし、彼の思うままにさせる。

むしろ彼女はソルジャーにおっぱいを吸わせるは好きなのだ、何させてもOKなので、何されていい。

ソルジャーは一度吸うのやめて、女武闘家に胸が大きくなる薬、巨乳薬を渡す。

「これ、飲んでくれるか？ 胸が大きくなる薬だ」

「これをですか？ 分かりました」

女武闘家は微笑みながら頷き、その巨乳薬を飲む。

すると少し苦しそうになる女武闘家は胸を少しだけ抑える、すると女武闘家のおっぱいが大きくなり、牛飼娘と同じ大ききさとなった。

「うわゝ…凄いい、私の胸…大きくなりました」

「凄いだらう？これが巨乳薬だ。あとこれも」

ソルジャーは巨乳薬の他に母乳薬も出して、それを女武闘家に渡す。

「母乳が出る薬。幼馴染の他に神官やエルフも使用したから問題ないよ」

「母乳…、私！ソルジャーさんに私の母乳を飲ませたいです！」

そう言つて女武闘家はソルジャーから母乳薬を貰つて飲む。

すると少しだけ苦しい表情をする女武闘家。

「っ……」

そして彼女の乳首から白い液体…母乳が噴き出し、同時に赤い血が少しだけ混じる。

おっぱいから出てくる母乳に女武闘家はマジマジと見ていた。

「す、凄いい…乳首から母乳が出てる」

「ああ、後その副作用でちよつと血が混じつてる所もあるけど、すぐに収まるよ」

そうソルジャーが言うとその通り母乳に混じった血はなくなり、白い母乳の色となつた。

白い母乳を見る女武闘家、そしてソルジャーの方を向いて、おっぱいを持ち上げて、微笑んで言う。

「ソルジャーさん、沢山飲んで下さい♡」

「ああ、それじゃ遠慮なく……頂きま〜す〜」

ソルジャーは飛びつきながら女武闘家のおっぱいに吸い付き、彼女の母乳を飲む。濃厚な甘みにすきつりとした喉ごし、とても飲みやすい母乳。ソルジャーはもう夢中になっている。

女武闘家は抱きしめて、頭を優しく撫でている。

その間に彼女の股は既に愛液で溢れている。

そしてもう我慢できなくなった女武闘家はソルジャーに言う。

「ソルジャーさん。私ソルジャーさんのおちんちんが欲しい……♡」

「分かった」

そう言ってソルジャーは女武闘家をベッドに寝かせて、彼女の股に入り込む。

すると女武闘家は自分で両足を広げ、まるでV字の様な体制になる。

自ら股を広げる様な行動。

「あははは……大分大胆になったな？」

「えへへ♡ ソルジャーさんの為ならどんな体制だって望みますよ。片足立ちとかうつぶせでお尻をあげるとか、色んな体制だとしてあげます♡」

そう言う彼女にソルジャーはなんて素直な子だと思った、これなら女神官より激しいプレイが出来るんじゃないかと思うくらいだ。

「それじゃあ、色んな体制はまた今度として、今は愛する事をさせて貰うよ」
「はい！」

ソルジャーは自分のペニスを女武闘家のマンコに当てて、そのままマンコに入って行き、それに感じる女武闘家。

「んっああああ……♡」

「やっぱり暖かい…気持ちいいよ」

「嬉しいです♡ 動いても良いですよ♡」

「分かった」

女武闘家の甘い言葉に素直に腰を動かし、彼女を気持ち良くさせる。

ソルジャーの大きなペニスは女武闘家のマンコを広げさせて、よりペニスを圧縮させる。
る。

その快感が気持ち良く、ソルジャーはより腰を動かした。

「あんっ♡んっ♡あん♡んっあ♡」

「気持ちいいか？」

「は♡はい♡ 気持ちいい♡です♡」

「よし、ならもつと早くするぞ」

そう言つてソルジャーは腰をより早く動かし、それにより女武闘家の快感は更に高鳴

る。

音をピチャピチャとたてながら。

「ああん！き！気持ちいい！ 凄いです！ソルジャーさん」

大きなおっぱいがブンブンと大きく動き、乳首から母乳を噴き出しながら、辺りを母乳まみれにする。

だがそんな事は一切気にしない2人、時にはソルジャーは母乳を吸いながら腰を動かし、女武闘家は受け入れる様に足を固めて、抱きしめる様にする。

そして乳首から離れて、ソルジャーのペニスは臨界点に近づく。

「そ！そろそろ限界だ！良いか!？」

「はい！出してください！沢山！ 赤ちゃんの精液！いっぱいくださいーい！」

「分かった！」

ソルジャーは早く動かしている腰を更に早く動かし、パンパンパンパン!!と鳴るくらい大きな音をたてて、最後に子宮の奥に突き出す。

「で！出る!!」

ドピュー！ドピュルルルルルルル!!

「来てます！ソルジャーさんの暑い精液が！子宮に入って！　いく！いくいくいくいくいく！！！！」

腰を大きくそらしながらソルジャーを抱きしめて、女武闘家は身体を痙攣させながら受け止めている。

暫くして、射精が2分か3分くらい続いて、収まるとソルジャーはゆっくりと腰を抜いて、膣や子宮に出した精液があふれ出てくるのだった。

そしてソルジャーと女武闘家は温泉に浸かり、ソルジャーに寄り添う女武闘家は今最高の極楽状態になっている。

「ソルジャーさんのおちんちん…とても気持ち良かったですよ」

「俺もだよ、あれだけ出せば絶対に——」

「妊娠ですか？　そうですね♡絶対に孕んでると思いますよ♪」

つと微笑みながらソルジャーに言う女武闘家、でもすでに受け入れる体制は整っている様子でソルジャーは気になっていいる事を問う。

「なあ、妊娠したらどうする？ 俺は勿論皆と結婚する気はある」

「そうですね…私は故郷には帰るつもりはありませんから、このままソルジャーさんと一緒に居ます。そして皆とまたエッチしたいですし♡」

「あはは、そうだな。…あいつも含め皆、絶対に幸せにする」

「期待してます、ソルジャーさん♡」

そう言つて女武闘家はソルジャーとキスをし、もうしばらく温泉に浸かるのであった。